



日本統計学会 会報 2007.10.25 No. 133

発行——日本統計学会
〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2階
(財)統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-5467-0483
編集責任 田中 勝人(理事長) / 川崎 能典(庶務理事)
坂本 亘(広報理事) / 福地 純一郎(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆「木に竹を接ぐ」……………柴田義貞… 1	7.2 市民講演会報告……………谷崎久志・羽森茂之・松林洋一…15
2. 第12回日本統計学会賞について	7.3 チュートリアルセミナー報告……………繁樹算男・樋口知之・上坂浩之…17
2.1 日本統計学会賞……………北川源四郎… 3	7.4 コンペティション講演報告……………富澤貞男…18
2.2 受賞のことば……………赤平昌文… 4	受賞のことば……………廣瀬善大…19
……………柳川 堯… 5	……………深澤正彰…20
3. 第3回日本統計学会統計活動賞について	……………小泉和之…20
3.1 日本統計学会統計活動賞……………北川源四郎… 6	……………田栗正隆…21
3.2 受賞のことば……………安田 聖・山口幸三… 7	8. 2008年度統計関連学会連合大会について……………21
4. 第3回日本統計学会統計教育賞について	9. 第75回日本統計学会総会報告……………21
4.1 日本統計学会統計教育賞……………北川源四郎… 8	10. 研究部会新設公募……………26
4.2 受賞のことば……………浜中順一… 9	11. 公募情報……………27
……………竹内俊哉…10	12. 研究集会案内……………32
5. 第1回日本統計学会研究業績賞について	13. 新刊紹介……………33
5.1 日本統計学会研究業績賞……………北川源四郎…11	14. 学会事務局から……………33
5.2 受賞のことば……………吉田朋広…11	15. 投稿のお願い……………34
6. 第21回日本統計学会小川研究奨励賞について	会告：学会誌の著作権委譲について……………35
6.1 日本統計学会小川研究奨励賞……………吉田朋広…13	
6.2 受賞のことば……………清水泰隆…13	
7. 2007年度統計関連学会連合大会報告	
7.1 企画委員会報告……………狩野 裕…14	

1. 巻頭随筆「木に竹を接ぐ」

柴田 義貞（長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科）

統計学がこれまで果たしてきた科学に対する貢献は大きいが、医薬品承認のような「規制科学」ではない本来の意味での科学に対しては、最近「木に竹を接ぐ」ものが少なくない。以下は、その事例である。

p値

医学の世界に身を投じて四半世紀以上になるが、医学者にとって $p=0.05$ は天国と地獄の境目のようである。多くの医学雑誌が「 $p<0.05$ の場合にのみ、結果は有意と述べること」という趣旨を執筆要領に明記している。その元凶は、p値と有意水準の混同、すなわち、Fisherの有意性検定

とNeyman-Pearsonによる仮説検定の混同であるが、誰がいつ頃招いたのか定かではない。しかし、計算環境の急速な改善が大きく働いたことは間違いない。

筆者は最近まである英文医学雑誌の編集に携わっていたが、次のような事例に遭遇して問題の根の深さを改めて痛感した。審査員の意見「XXに関する著者らの最初の論文(Ref. 5)によるとAは従来のBと有意な正の相関ありとなっています($p < 0.0001$)。しかし、本論文では有意な相関は出ていません($p = 0.056$)。この違いについてdiscussionしていただければと思います。」に対する著者の回答は「対象症例におけるBとAとの相関の不一致に関しては、現時点ではその理由を明らかにすることが出来ず不明と言わざるを得ません。この点に関しては今後の検討課題とさせていただきます。」というものであった。因みに標本の大きさと相関係数は、それぞれ、 $n = 24$, $r = 0.424$ であった(Ref. 5では r はほぼ同程度であったが、 n は60以上であった)。そこで筆者は著者に次のようなことを伝えたが、どこまで理解されたかは定かではない。「一般的にいて、MDの方は p 値の意味を誤解されているようです。 p 値が小さい程関連性が高いと思われる方が少なくありませんが、これは全くの誤解です。たとえば、 $n = 1000$ であれば、 $r = 0.1$ でも $p = 0.002$ となり、 $n = 20$ の場合は、 $r = 0.4$ であれば p 値は0.05を僅かに超えます。前者より後者の方が関連性のあることのエビデンスは高いと思いますが、如何でしょうか。推定値を常に念頭に置いて検討してください。異なる研究の p 値を比較することの統計学的意味も根拠ありません。また、 $p = 0.056$ と $p = 0.049$ には、事実上差はありません。」

ところで、GoodmanはBayes因子に基づいて、 $p = 0.05$ は帰無仮説を棄却するにはエビデンスが中程度であり、少なくとも $p = 0.01$ 以下でなければ強いとはいえないことを示している(Ann Inter Med 130, 1999)。

検定の多重性

一組のデータに対して種々の仮説を検定すると、審査員からはほとんど確実に、検定の多重性を回避するため、Bonferroniの不等式などを用いて個々の検定の有意水準を調整し、第1種の過誤を犯す確率が全体として、たとえば5%になるようにせよ、という意見を受ける。

検定の多重性は有意性検定の哲学とは無縁であるが、仮説検定の立場に立っても、筆者にはその論拠に釈然としないところがある。異なる検定をそれぞれ有意水準5%で検定すると、差がなくても5個位は有意となる仮説がある、というのが教科書的な説明であるが、この説明には大きな論理の飛躍があると考ええる。その理由は、検定の有意水準はサンプリング誤差に起因するものであるが、上述の論理は、一組のデータにおける検定の繰返しがサンプリングの繰返しと同一であるということ为先見的に是としたものと考えられるからである。

最近は多数の遺伝子を同時に分析することが可能になっており、上述のような調整を行うと、個々の検定の有意水準はほぼ0となる。

社会調査

1936年の米国大統領選挙において、電話帳と自動車所有者名簿を用いて選んだ1000万人にアンケート用紙を郵送し、返送されてきた200万余りの結果に基づいて、共和党のランドン候補の当選を予想したダイジェスト社に対して、3000人を調査した社会心理学者のギャラップが民主党のルーズベルト候補の当選を的中させた。筆者は医学統計学などの講義において、偏りのない標本調査の重要性を理解させるために、必ずこのエピソードを紹介してきた。

新聞社の調査は、1995年あたりまでは、偏りのない標本調査の実施に努めていたが、最近は上述のダイジェスト社の調査と大差がないものが少なくない。原爆被爆60周年を機に朝日新聞社が実施した原爆被爆者の調査はその一つである。2005年5月15日の同紙には「被爆者4万人アンケート」

という見出しが、また同年7月17日の同紙には「原爆体験『思い出す』8割」の見出しと共に「被爆者1万3000人本社アンケートに回答」「『健康に不安』9割」の大きな活字も躍っている。2005年3月末現在の被爆者（被爆者健康手帳を交付された者）は26万人弱で、その居所は全都道府県にわたり、約45%、26%がそれぞれ広島県、長崎県に住んでおり、東京都在住者は3%強であった。この調査は日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の協力の下で実施され、対象者は調査

用紙が送達可能な約4万人（全国の被爆者の15%強）であった。回答率は約32%で、回答者の居住地は広島県36%、長崎県13%、東京都12%などであった。この記事すべての写しを渡して600字以内で論評させるということを行ってきたが、ほとんどの学生がこの調査の本質を見抜くとともに「今後は新聞等の統計数値を注意して読まなければ」という感想を漏らしていた。

実に「生兵法は大疵の基」なり。

2. 第12回日本統計学会賞について

2.1 日本統計学会賞

北川 源一郎（日本統計学会会長）

第12回日本統計学会賞の受賞者は

赤平 昌文 氏（筑波大学）

柳川 堯 氏（久留米大学）

の方々に決定いたしました。受賞者の皆様には、それぞれ賞状と副賞の時計が贈呈されました。授賞理由と受賞者の略歴は以下の通りです。

〔1〕受賞者氏名：赤平 昌文 氏

略 歴：1969年早稲田大学理工学部数学科卒業、1977年理学博士（早稲田大学）取得、1972年電気通信大学助手、1978年電気通信大学助教授、1987年筑波大学数学系教授、2007年筑波大学大学院数理物質科学研究科長・教授、現在に至る。

授賞理由：数理統計学、特に統計的推測理論とその応用に関して多くの優れた業績を挙げた。特に推定の高次漸近理論および非正則理論に関する研究は国際的に先駆的なもので、多数の研究論文とモノグラフを通じてこの分野での開拓者として大きな役割を果たした。国際的学術誌への編集貢献も多大である。また、後継者育成に尽力すると同時に、多年にわたり研究代表者として大型の科学研究費を継続的に獲得することで多くのシンポジウム開催を支援し、統計学界の発展に多大な貢献があった。

主要業績：

1. “*The Structure of Asymptotic Deficiency of Estimators*,” Queen’s Papers in Pure and Applied Math., 75, Queen’s Univ., Press, Kingston, Canada, 1986.
2. “Behaviour of jackknife estimators in terms of asymptotic deficiency under true and assumed models,” *J. Japan, Statist. Soc.*, 19 (2), 1989, 179-196.
3. “Third order efficiency implies fourth order efficiency: A resolution of the conjecture of J.K. Ghosh,” *Ann. Inst., Statist. Math.*, 48 (2), 1996, 365-380.
4. “*Non-Regular Statistical Estimation*,” Lecture Notes in Statistics, 107, Springer, New York, 1995, with K. Takeuchi.
5. “*Joint Statistical Papers of Akahira and Takeuchi*,” World Scientific, New Jersey, 2003, with K. Takeuchi.

〔2〕受賞者氏名：柳川 堯 氏

略 歴：1963年九州大学理学部卒、1966年大阪大学基礎工学部助手、1975年九州大学理学部助教授、1992年九州大学理学部教授、2004年久留米大学バイオ統計センター教授

授賞理由：統計学、特に離散多変量データ解析、ノンパラメトリック法に関して数々の新しい手法

を提唱し、数理的性質の解明に大きな成果を挙げた。また、長年にわたりバイオ統計、疫学、環境因子のリスク評価等の実際問題に取り組む中で、交絡因子があるときの影響評価法、毒性の用量反応特定への推測法、複雑非線形データの統計的解析法などを開発し、統計学の応用にインパクトのある業績を多数残した。さらに日本統計学会を始め国内外の学会の発展への尽力は大きく、日本学術会議会員、政府審議会委員としても重責を果たし、統計学界の発展に多大な貢献があった。

主要業績：

1. “Estimation of some functionals of the population distribution based on a stratified random sample,” *Ann. Inst. Statist. Math.*, 24, 137-151, 1972, with K. Wakimoto.
2. “Case-control study: assessing the effects of a confounding factor,” *Biometrika*, 71, 191-194, 1984.
3. “Use of historical controls for animal experiments,” *Environmental Health Perspectives*, 63, 217-224, 1985, with D.G. Hoel.
4. “Incorporating historical control in testing for a trend in proportions,” *J. Amer. Statist. Assoc.*, 81, 1095-1099, 1986, with D.G. Hoel.
5. “Projection-Method Mantel-Haenszel estimator for $K \times J$ tables,” *J. Amer. Statist. Assoc.*, 90, 649-656, 1995, with Y. Fujii.

2.2 受賞のことば

[1] 受賞のことば：「統計学の旅人」

赤平 昌文（筑波大学）

この度は、日本統計学会賞を受賞し大変光栄に思っております。私は大学の数学科に入学し、3年次末に何を専門にしようか迷った末に、どちらかといえば代数系よりも解析系の方が得意だったこともあり、また当時、コンピュータも発達しつつある状況で、最終的には将来性も考え、数理統計学に決めた。今では、その当時のこの選択は間違っていなかったと思う。大学院時代に、統計数

理研究所において研究員の方々と週に一回行ったセミナーではとても刺激を受けた。

若い頃に大きな影響を受けたのは、日本と旧ソ連との日ソ確率論シンポジウムと当時の西ドイツのオーベルボルファッハ（Oberwolfach）数学研究所での研究集会である。前者のシンポジウムに関しては、1971年8月、京都で第2回日ソ確率論シンポジウムに参加し、旧ソ連の研究者の仕事にいろいろ触れることができた。当時はまだ東西冷戦の時代で、ソ連は米国と並ぶ大国であった。さらに、その後、第3回（1975、タシケント（Tashkent））、第4回（1982、トビリシ（Tbilisi））、第5回（1986、京都）、そして、ソ連邦崩壊後に、日露確率・統計シンポジウム（1995、東京）に参加。そこでは、シリヤエフ（A.N. Shiryaev）氏、イブラギモフ（I.A. Ibragimov）氏、ハスミンスキー（R.Z. Has'minskii）氏、カガン（A.M. Kagan）氏、チビソフ（D.M. Chibisov）氏、ボロフコフ（A.A. Borovkov）氏らそして、当時、若手であったレビット（B.Ya. Levit）氏、クレバノフ（L.B. Klebanov）氏、メラメッド（I.A. Melamed）氏らとも知り合うことができた。特に、旧ソ連の研究者の極限定理を駆使する手法は巧みであり、大変参考になった。また、当時のソ連の研究者は自分に自信をもち生き生きしていたのが印象的だったが、ソ連邦崩壊後は多くの優秀な研究者は国外に流出してしまったのがとても残念である。シリヤエフ氏がソ連では確率論と数理統計学は一体と考えて区別されないのに、日本では必ずしもそうでないことを不思議がっておられたのが印象に残っている。次に、オーベルボルファッハ数学研究所での研究集会であるが、この研究所はドイツのフライブルグ近くのシュバルツバルト（黒い森）の中にあり、世界中から第一線の研究者が招待され、数学（もっと広く数理科学）に関するテーマ毎に研究集会が1週間の合宿形式で行われる。研究所には家族用のバンガローを含む宿泊施設、研究集会用の建物があり、非常に充実した図書室の他に音楽室もあり、ビリヤード台等もあって集会の合間に楽しむことができた。私は、1977年に開催さ

れたファンツァグル (J. Pfanzagl) 氏らが代表者の研究集会「統計の漸近的方法」に招待されて出席し、差分尤度推定量の漸近的性質について講演するとともに、セン (P.K. Sen) 氏、ライ (T.L. Lai) 氏、ビッケル (P.J. Bickel) 氏、ヴァン・ツヴェト (W.R. van Zwet) 氏、ダービン (J. Durbin) 氏らとも知り合った。なお、この頃は、高次漸近理論の研究を竹内啓先生とともに積極的に推進していて、ファンツァグル氏らのグループとはその研究のプライオリティに関わる激しい競争をしたが、それも今ではとても懐かしい思い出になっている。その後、1982年、1988年、1992年に開催された研究集会に出席し、一流の研究者がどのような方法でどのように研究を進めるのか大変参考になった。そこでは、旧ソ連から米国に移ったディンキン (E.B. Dynkin) 氏、フランスのマリアヴァン (P. Malliavin) 氏、米国のヴァラダン (S.R.S. Varadhan) 氏 (今年のアーベル賞受賞者) 等の錚々たる方々とも意見を交わすことができ、とても有意義な時を過ごした。

その他にも、米国のスタンフォード大等に長期滞在し、有意義な経験をしたが、特に、第1次湾岸戦争開始直前の1990年の春から夏にかけて、トルコのアンカラにある中東工科 (Middle East Technical) 大学統計学科に招待され滞在した。初めてのイスラム圏での生活はいろいろ興味深いことも多く、未知の世界を垣間見た。そこに招待されるきっかけになったのは、その大学のイルディリム (F. Yildirim) 氏が、1980年代半ばに出版された京大数理解析研究所講究録 “Non-Regular Statistical Estimation” に掲載された手書きの和文の論文に関心をもたれたことからである。先日、リスボンで開催された国際統計協会第56回大会で会場から帰りのバスの中で、偶然、彼に再会し、久しぶりに旧交を温めた。

上記のように、統計的推測理論の研究を通して、様々な国々を旅し多くの統計学者と知己になり、またそこで経験をしたことは今に至る研究にもいろいろ反映している。

最後に、大学の助手になった頃から今日に至る

まで、統計学の理論の真髓をお教え頂くとともに沢山の協同研究をさせて頂いた竹内啓先生に心から感謝申し上げます。また、日本統計学会賞に推薦して下さい方にも心から御礼申し上げます。

[2] 受賞のことば

柳川 堯 (久留米大学バイオ統計センター)

統計学会賞をいただき大変光栄です。しかし、正直なところ、うれしいというより、むしろ、恥ずかしいという気持ちです。賞に値するような仕事、皆様に誇れるような業績は、まだ、残していないと思っているからです。

ともあれ、この機会に、できの悪い男をご指導いただいた先生方、見捨てずにお相手いただいた同僚・友人、支えてくれた後輩の方々に、改めて、心からお礼申し上げさせていただきたいと思います。

受賞理由の中には数理統計的な業績も含まれているようですが、私は、サリドマイド事件で活躍された増山元三郎先生、吉村 功先生などの影響を受けて、数理統計学からドロップアウトしてもっぱら医学・疫学データに目をすえて、統計解析手法の発展や数理構造の解明に力を尽くしてきました。特に、1977年にアメリカ合衆国国立がん研究所で1年間過ごした経験およびそこでのNathan Mantelとの出会いが決定的でした。医学データでは、患者さん一人ひとり疾患の重さ、病歴、遺伝的要因、環境的要因が異なっています。その上、人体実験が許されないという制約もあります。このような制約の中で、有効な情報をデータとして、いかに取り出し、解析すればよいかという大変重要な、従来の数理統計学のパラダイムでは対処できない新しい大きな統計学の問題があります。また、人の健康と環境に関する分野、ゲノム情報を医療に最適に利用する分野などで、たくさんのデータが蓄積され、統計解析手法の開発が期待されています。米国国立がん研究所滞在中にこの分野での日本の遅れを痛感しました。私どもは、これらにかかわる統計学をバイオ統計学と名づけわが国におけるバイオ統計学の振興に力を尽くしていま

す。幸い、文部科学省の支援の下で久留米大学大学院医学研究科にバイオ統計学の修士課程・博士課程を設立することができ、医師や医療に携わっている情報科学研究者などと力をあわせながら、まさに従来の統計学の枠の外に向かって、バイオ統計学の問題に挑戦し、バイオ統計学の発展や人材養成に微力を注いでいます。

統計学会賞受賞は、このように統計学のフロンティアの場で他の分野の研究者と切り結びながら仕事をしている男にとって大変力強い有効なご支援をいただいたものと深く感謝するところです。ありがとうございました。

3. 第3回日本統計学会統計活動賞について

3.1 日本統計学会統計活動賞

北川 源四郎（日本統計学会会長）

「日本統計学会統計活動賞」は、研究や教育に限らず、広く統計学および統計の分野において高く評価しうる「活動」を顕彰するために2005年度から始められたものです。第3回受賞活動は

学術研究のための政府統計マイクロデータの
試行的提供活動

に決定いたしました。受賞活動の担い手である、一橋大学経済研究所・附属社会科学統計情報研究センターには、賞状と賞牌が贈呈されました。受賞された活動の概要と受賞理由は以下の通りです。

受賞活動の名称：学術研究のための政府統計マイクロデータの試行的提供活動

活動の担い手：一橋大学経済研究所 附属社会科学統計情報研究センター（代表者：西澤 保氏）

活動の概要：一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターは、前身の日本経済情報センター時代から政府統計マイクロデータの開示に積極的に取り組んできた。特に1995年から科研費特定領域の交付を受けて行った研究は、5省庁の33に及ぶ指定統計に関し目的外使用の承認を受けた大規模かつ画期的なものであった。

その成果の拡充が日本学術会議の対外報告で要望された結果、現センターへの改組拡充に至っている。更に、「統計行政の新たな展開方向」の申

し合わせを基にした総務省統計局の依頼により、匿名化標本データの提供を、定期的に行っている。

授賞理由：日本では統計調査そのものは国際的水準に達していたにもかかわらず、マイクロ統計データの活用においては欧米に遅れをとってきた。今回受賞対象の活動は、これまで利用に多くの制限のあった政府統計のマイクロ統計データを、匿名化標本データという形式で、実証分析研究者に利用する機会を広く与えるものである。

このような貢献は、実証的統計研究のための活動基盤を国際的水準に引き上げることが期待されるとともに、本年5月の統計法の改正を推進する上でも大きな役割を果たしており、組織による活動として顕彰するに相応しいものである。

活動実績：

1. 年4回の定期的募集により、広く大学の専任教員から参加を得て下記調査の匿名化標本データを提供。
 - ・住宅・土地統計調査（平成5年、10年、15年）
 - ・就業構造基本調査（平成4年、9年、14年）
 - ・社会生活基本調査（平成3年、8年、13年）
 - ・全国消費実態調査（平成元年、6年、11年、16年）
2. 2006年度で29件、累計66件の申請を受理。

3.2 受賞のことば

安田 聖・山口 幸三（一橋大学経済研究所
附属社会科学統計情報研究センター）

この度、一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターが行っています政府統計マイクロデータの試行的提供活動が、第3回日本統計学会統計活動賞を頂くことを、センターのメンバー・研究所員一同大変光栄に思っております。

私どものセンターが今回受賞できましたのは、多くの方々のご協力、ご支援のおかげであります。まず何よりも、センターのマイクロデータの利用促進活動に理解を示され、統計調査のマイクロデータを提供し、試行的提供活動を共同事業として行っていたいただいている総務省統計局のご厚意がなくてはできない活動でした。また、センターの利用者募集に応じていただき、二次的分析に役立てられた研究者の方々、論文を執筆・公表までされた研究者の方々の研究活動なしには受賞もなかったと思っています。この場を借りまして総務省統計局および利用者の皆様に深く感謝申し上げます。

私どものセンターは、前身の日本経済情報センター時代から政府統計マイクロデータの開示に積極的に取り組んできました。特に1996年度から1998年度にかけて特定領域研究「統計情報活用のフロンティアの拡大—マイクロデータによる社会構造分析—」（代表者 松田芳郎）は、1995年の統計審議会の「統計行政の中長期構想」に提言されている統計情報の公表形態の多様化と、多角的利用の高度化の実現のための方策、特にマイクロデータの活用を学問的に検討するものでありました。この特定領域研究には、多くの研究者に参加いただき、延べ76の目的外使用の承認を受けた大規模なものであり、その後のマイクロデータの開示問題に一石を投じたと思っています。

特定領域研究の成果を踏まえて、次の段階として、2001年の日本学術会議対外報告に呼応して、現センターへの拡充改組を行い、マイクロデータ分析セクションを設け、マイクロデータの利用を促進する活動を開始しました。

一方、2003年の各府省統計主管部局長会議申合せ「統計行政の新たな展開方向」を受けて、総務省統計局では匿名標本データの利用ニーズや提供方法の問題点を把握する目的で実験的な提供を行うために、学界でのマイクロデータによる実証研究の拠点形成を目指している私どものセンターに依頼されて、匿名標本データの提供を定期的に行うこととなりました。

現在では、就業構造基本調査、全国消費実態調査、社会生活基本調査、住宅・土地統計調査の4種類の大規模標本調査の匿名標本データを提供しています。年に4回の定期的募集を行い、広く大学の専任教員から応募を得て、この7月までに累計66件の申請を受理いたしました。

申請件数が増えるとともに、提供しました匿名標本データを用いた研究成果が発表されるようになってきました。センターとしては、そのような研究成果を今年の8月から公開しています。これは、マイクロデータによってどのような研究ができるのかを多くの研究者の方々に知っていただき、更なる研究の発展に役立つものと考えています。

我が国の統計調査は、国際的にも高い評価を受け、様々な分野の統計が整備されてきていますが、統計データの二次的な利用については、欧米諸国と比べて、著しく制約され、遅れをとってきました。私どもセンターの活動は実証分析を行う研究者に利用する機会を広く提供するものであり、実証分析における学問的な水準を引き上げることになります。

また、データアーカイブの必要性を広く知らしめることにつながったと思っています。統計データの二次的な利用のためには、マイクロデータの保存・管理が不可欠です。試行的提供の利用者の方々は、マイクロデータの提供活動が継続され、提供されるマイクロデータも順次整備されることを望んでおられます。

今年5月に統計法が改正となりました。新統計法には、匿名データの作成と提供の規定が盛り込まれています。本格的な施行は、平成21年春になると思われますが、本格的な提供においても、私

どもセンターでは、試行的提供の経験とノウハウを生かして、マイクロデータの提供活動を続けて行きたいと考えています。できるならば、試行的提供以上に、提供する調査の範囲の拡大、使用者の範囲の緩和、提供手続きの効率化などが実現できるように一層努力し、マイクロデータの利用をさら

に促進していきたいと思っております。

このように社会科学の分野の実証分析を行う研究者に利用する機会を広く提供し、実証分析における学問的な水準を引き上げることに貢献していきたいと思っていますので、今後とも皆様の益々のお力添えを頂くことをお願い申し上げます。

4. 第3回日本統計学会統計教育賞について

4.1 日本統計学会統計教育賞

北川 源一郎（日本統計学会会長）

「日本統計学会統計教育賞」は、統計教育の研究及び実践において、顕著な業績をあげた個人または団体を顕彰するために2005年度から始められたものです。第3回受賞者は

財団法人 日本科学技術連盟

竹内 俊哉 氏（名古屋市立港南中学校）

に決定いたしました。受賞者・受賞団体には、それぞれ賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と受賞者・受賞団体の略歴は以下のとおりです。

[1] 受賞団体・活動名：(財)日本科学技術連盟・品質管理セミナーベーシックコース

略 歴：日本科学技術連盟は、科学的経営管理技術の開発と普及を目的に1946年に設立された科学技術庁（現在の文部科学省）所管の財団法人で、設立以降、国内約1,000社の賛助会員企業とその他の企業を対象に、統計的品質管理と品質経営に関する教育事業やデミング賞などの表彰活動を通して、日本における産業界の振興に寄与してきた団体。

授賞理由：教育事業の中の「品質管理セミナーベーシックコース」の統計教育に対する貢献は大きく、産業界の品質向上と人材の育成という付託に応えた実践的な統計教育の方法論を確立したことは、敬意をもって高く評価することができる。特に、

1. 統計手法への理解度を深めるコース設計とテキスト内容を長期間の実績に基づいて確立した

こと

2. コンピューター・シミュレーションを活用するなど、教育の情報化への最新の対応により教育の質の改善に成果をあげ、多くの企業の社内教育に範を示していること
3. 自己の理解度を客観的に確認できる試験（Student Test）を開発し、統計的課題解決力を測る枠組みを確立したこと
4. 受講生および指導講師陣（大学研究者）との研究会を発展的に組織し、学術的な産学交流基盤を提供していること
5. コースの内容は品質管理検定の最上位レベルである1級レベルに対応する評価を受けていること

などの点は特筆に値する。これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

活動実績：品質管理セミナーベーシックコースは、1949年に開設以来、2006年度までの57年間にわたり、延べ110回、271クラス、32,420名の研修生を日本の産業界に送り出した。

[2] 受賞者氏名：竹内 俊哉 氏

略 歴：昭和61年愛知教育大学卒業、同年名古屋市立御田中学校教諭、平成4年名古屋市立駒方中学校教諭、平成14年名古屋市立港南中学校教諭（担当科目：理科）。

授賞理由：名古屋市統計教育研究会に所属し、「情報を処理し活用する力を育てる理科指導」というテーマで研究実績を有し、課題を「つかむ」、データを「あつめる」「まとめる」「よみとる」「生かす」といった段階を追った指導により、統

計的課題解決力を育む授業スタイルを確立、平成18年度の名古屋市理科教育研究会の研究授業に採用され、公開授業を通して多くの教員に授業モデルを示した。

この成果は、平成19年度の日本統計学会統計教育分科会主催の第3回「統計教育方法論ワークショップ」の中の教育方法事例セッション（コンペティション形式）で発表され、審査委員会では、法則を覚えさせるのではなく生徒自らが知識を発見する授業形態が高く評価され、7件の教育方法事例報告の中で最優秀賞を獲得した。今年度は名古屋市教育研究員としても採用され、理科教育の場で統計的思考力を重視する授業研究を進めており、竹内氏の貢献は統計教育賞として顕彰するに相応しいものである。

主要業績：

1. 「地球温暖化防止への意欲を高める理科指導－エコハウスの模型作りを通して－」、名古屋市理科教育研究会 研究要録 No.10, 31-36, 2005年。
2. 「自然体験の場を多く取り入れる理科学習－簡易学校ビオトープの作成と継続観察－」日本理科教育学会 第48回東海支部大会, 名古屋女子大学, 2001年11月。
3. 「メダカの生態づくりを通して」第3回統計教育の方法論ワークショップ, 同志社大学京田辺キャンパス, 2007年3月。

4.2 受賞のことは

〔1〕受賞のことは：「統計教育賞」を受賞して
浜中 順一（（財）日本科学技術連盟・理事長）

このたびは、当財団の基幹教育事業でもある「品質管理セミナーベーシックコース」に対し、日本統計学会第3回統計教育賞を授与していただき、大変光栄に存じております。

この「品質管理セミナーベーシックコース」を、日本企業の競争力向上に不可欠な統計的品質管理のエキスパートを養成する、わが国で伝統と実績のある統計的品質管理の本格的な教育コースとし

て受賞の対象としていただきましたことは、大変名誉に感じているところであり、指導講師をはじめ関係者一同、この栄誉を喜ぶとともに、日本統計学会関係者の皆様に心より感謝申し上げます。品質管理セミナーベーシックコースは、「品質管理技術に関する深い知識と高い応用力の習得」をねらいに1949年に開設以来、今日まで58年間にわたり、3万名以上の研修生を産学界に送り出しております。

製品・サービスや業務プロセスの品質を確保・管理するためには、具体的なデータに基づく科学的な分析と判断が求められます。特に製品・商品の品質管理に関しては、変動する品質特性とそれに影響する多くの要因の関係を定量的に分析することが求められ、統計的手法が必要不可欠なツールとなってまいります。

また製品・商品の集団の品質を統計的品質と呼びますが、この統計的品質は、製品の集団全体の品質の傾向を示すもので、集団の品質特性の統計的分布によって定められます。この統計的品質は材料、機械・装置、作業、計測などの標準とその実施のプロセスによって決まってまいります。すなわち統計的品質を管理し、改善するためには製品の検査ではなく、これらのプロセスの管理と改善が必要になってまいります。この「プロセス重視」の考えは品質管理の基本の一つであり、統計的品質を獲得するためにはプロセスを支配している法則を解明しコントロールすることが非常に重要になります。更に生産プロセスのみならず技術開発、設計、物流、販売などの活動の分析と管理においても統計的方法是きわめて有効な手段であると考えております。

このような認識のもとに「品質管理セミナーベーシックコース」では、統計的手法を中心に理論と実践を融合した形でカリキュラムが組み立てられています。また製品の安全性・信頼性を保証するために必要な信頼性工学、品質工学に関しても、多様な教育方法を通して技術が習得できるように工夫をこらしております。

この長い歴史を持つコースは多くの修了者から

高い評価を得ており、特にものづくりの品質向上に多くの貢献をしてきたものと自負しております。

いま日本企業をとりまく経営環境はダイナミックに変化しようとしています。今回の受賞を機に、このような経営環境の変化にも対応できるように講義内容の進化・充実を図り、グローバル競争の渦中にある日本企業をしっかりと支援してまいります。関係者一同、一層の努力を重ねますので今後とも日本統計学会各位のご指導をお願いいたします。

[2] 受賞のことは：「統計教育賞」を受賞して

竹内 俊哉（名古屋市立港南中学校）

このたび、「統計教育賞」を授与していただき大変光栄に感じております。また、全国統計教育協議会の中川雅義様を始め、日本統計学会統計教育分科会会長の渡辺美智子先生、名古屋市統計教育研究会など関係者の方々、本校の職員に心から感謝申し上げます。教育の主役は生徒であります。この栄誉は生徒全員のものであり、生徒とともに喜びを分かち合いたいと思います。

今回の実践では、メダカの継続観察を中心とし、飼育環境の改善のため統計処理を導入しました。本来、メダカのような生物教材は、個体間格差やデータサンプル数の少なさなどが統計上の問題点となり、統計的手法をなかなか導入しにくいというのが現状だと思います。本実践においても、データサンプルの数が少なく、厳密な対照実験も行っていないため、学術的には問題点が多いと感じています。

本実践の目的は、生態系のバランスの上にメダカが活着していることを、生徒が実感することです。そして、この実践を通して生徒のメダカを愛する心、生命を尊重する心を育てたいと考えました。この目標を達成するためには、メダカの生育環境を整えなければなりません。そのためには、水質の変化に注意することになります。なぜならある水族館の飼育員の方が、「魚は、水槽など限られた水の中に入れた瞬間から、（水質が悪化するた

め）死に向かい始めています。」と申ししていたからです。メダカの死の要因の一つとして考えられることは、水質変化なのです。

私は、この実践をする前、水質を市販のバックテストで調べれば水質変化がすぐ分かると思っていました。バックテストの結果を表にまとめて、統計処理を生徒にさせようと考えていたのです。しかし、調べて出てきた数値は、水道水とあまり変わりませんでした。理由の一つとして考えられることは、河川などの水と違い2ℓぐらいの量では、数値的に差が出ないようです。もっと厳密に測定できる装置が必要のようです。

メダカの死の要因を、バックテストの数値を基に統計的手法で探そうと考えていたのが白紙に戻ってしまいました。しかし、途中の紆余曲折はありましたが、メダカの死の要因をつかんだのが、私が全く考えてもいなかった統計的手法でした。中学校では、統計的手法は入手したデータを基に作成した表やグラフを活用・分析し、そこから傾向を読み取り、結論を導き出すために使われます。表やグラフにデータを記入する場合、すでに縦軸は〇〇、横軸は△△と指定されていることが多いのです。なぜ、縦軸は〇〇で、横軸は△△なのか考える余地はありません。私も、今までなぜそうなっているのかを生徒に問うことはありませんでした。

本実践では生徒が、棒グラフの項目を変えるだけでグラフがまったく違う傾向となることに気付きました。データの種類を変えてグラフを作るとどのような傾向になるのかをいろいろ試して、大まかではありますが、メダカの死の要因をとらえることもできました。少ないデータサンプル数ではありましたが、このような大まかな傾向をとらえるために統計的手法を取り入れることも、一つの方法ではないかと考えます。

現在、私は教師が余分な介入をなるべくしないようにして、生徒同士で話し合い学び合う実践を行っています。本実践でも、生徒同士の話し合いの中で「土ありと土なしでグラフを作ったらどうか」という発言が大変重要なポイントとなりました。

た。このように生徒たちの中にある発想には、教師が考える範囲を超える場合が多々あり、いつも驚かされるばかりです。

今回のこの受賞をきっかけに、統計教育についてさらに勉強し、生徒同士による話し合い・学び合う授業の追求に力を入れていきたいと考えています。具体的には、実験などで得たデータをどう活用するか、そのためにどのようなグラフや表が

わかりやすいかを生徒たちに話し合わせ、考えさせていきたいと考えています。

最後になりますが、今後もデータを基に物事を語ることができる人間の育成に力を入れていきたいと考えております。よろしくご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

5. 第1回日本統計学会研究業績賞について

5.1 日本統計学会研究業績賞

北川 源四郎（日本統計学会会長）

「日本統計学会研究業績賞」は、統計学および関連分野における優れた研究業績をあげた研究者を顕彰するために創設された賞です。第1回受賞者は

吉田 朋広 氏（東京大学）

に決定いたしました。受賞者には賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と受賞者の略歴は以下のとおりです。

受賞者氏名：吉田 朋広 氏

略 歴：1985年京都大学理学部数学科卒，1987年大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了，1989年大阪大学基礎工学部助手，1993年統計数理研究所助教授，1996年東京大学大学院数理科学研究科助教授，2003年同教授

授賞理由：確率過程の統計推測理論とその実用的な応用に関し、優れた研究業績を挙げた。とりわけ、一般的な確率過程のクラスに対して、加法的汎関数および統計量の漸近展開の正当性を証明し、連続時間確率過程の高次漸近理論への道を開いた。ジャンプ型非正則汎関数に対して漸近展開の方法を与え、摂動法を一般化した。確率数値解析の分野では、オプション価格の漸近展開法の導入に引き続き、漸近的な方法による制御変数法を提案し、利便性の高い方法と評価され実用されている。また、非同期観測における共分散推定量と

して同期修正を必要としない優れた推定量を提案した。このように、従来困難とされてきた確率過程の漸近理論とファイナンスを中心とする応用分野において刮目すべき成果を挙げた。これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

主要業績：

1. Conditional expansions and their applications, *Stochastic Processes and their Applications*, 107, 53-81, 2003.
2. Partial mixing and Edgeworth expansion, *Probability Theory and Related Fields*, 129, 559-624, 2004.
3. Asymptotic expansion formulas for functionals of ε -Markov processes with a mixing property, *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, 56, 545-597, 2004, with Y. Sakamoto
4. Monte Carlo simulation with asymptotic method, *J. Japan Statist. Soc.*, 35, 171-203, 2005, with A. Takahashi.
5. On covariance estimation of nonsynchronously observed diffusion processes, *Bernoulli*, 11, 359-379, 2005, with T. Hayashi

5.2 受賞のことは

吉田 朋広（東京大学）

このたびはこのような賞を頂き光栄に存じます。これは、ご指導を頂いた先生方、多くの共同研究者や分野を越えた大勢の皆様の支えによるも

のです。

確率微分方程式や点過程といった確率過程の統計学は、私が勉強を始めた今から20年ほど前は、まだ基本的な技巧も出揃ってはならず、若い分野でした。当時は確率過程の統計学を体系的に教育する環境はなく、私が研究者になれたのは、多くの先生方からの確かな助言と示唆を頂いたお陰です。それは細かな技巧というよりはもっと根源的な、確率統計の構造についての洞察とビジョンに関するものです。

専攻を変え、遅くに統計学を志し、確率論の勉強を渡辺信三先生のご指導のもとで始めました。セミナーと講義ではフーリエ解析やタイトネスと確率分布の収束など教えていただきました。大阪大学では、丘本正先生、稲垣宣生先生、白旗慎吾先生から多変量解析、統計一般理論、ノンパラメトリック統計等多くの事を教えていただきました。稲垣宣生先生からは、LeCamの理論、尤度比確率場の収束理論、情報量規準などを習いました。とくに尤度比確率場の理論は、タイトネスと統計的漸近論が協同し興味深いものでした。大阪大学は漸近展開の話がよく聞かれ、長い式や情報幾何も自然に触れることになりました。確率解析も学びましたが、将来の研究テーマを意識していたのかも知れません。渡辺先生のお仕事に興味があり、マリアバン解析も勉強するようになりました。

修士論文のテーマについて稲垣先生のお部屋に伺ったときと思いますが、Yury Kutoyants先生の本を紹介されました。拡散過程や点過程の統計モデルに対してIbragimov-Hasminskii理論を展開し、漸近決定論のある意味で最高到達点を目指した意欲作で、その後も強く影響を受けることになりました。拡散過程と点過程はセミマルチンゲールというより広いクラスで扱うことができ、尤度比の漸近挙動は決定論研究の第一歩のため、それを修士論文のテーマに選び、Basawa-Scottの非エルゴード統計、Jean Jacod先生の本を学びました。修士以降から助手の頃は拡散過程を中心に、ロバスト推測、尤度比確率場の収束、サンプリング問題など、1次の漸近論をやっていました。

90年に統計数理研究所に移りましたが、長年気になっていた、確率微分方程式に対する漸近展開の計算に取りかかりました。エルゴード的な場合が目標でしたが、純粹に分布論的なため漸近展開は未知で、そのため、研究の雛形として小さな拡散過程に対して計算を始めることにしました。このモデルに対しては、統計量の漸近展開に必要な尤度比確率場の大偏差不等式はKutoyants教授の本に1次漸近論の文脈で与えられており、小さな拡散過程の汎関数の漸近展開には最新の渡辺理論があり、具体的に研究を始める動機としては十分でした。幾つか困難はありましたが、推定量の漸近展開が得られ、赤平-竹内の意味の2次漸近有効性も示されました。確率微分方程式に対して得られた漸近展開公式が良い近似を与えることを数値的に確認したときは少なからず感動を覚えました。暫くして国友直人先生から、ブラック・ショールズモデルでのオプション価格の、対数正規近似による計算について伺いました。小さな拡散過程の漸近展開の副産物として平均オプション価格の漸近展開が導出でき、統計学会誌に掲載して頂きました。この方法が、国友直人教授、高橋明彦教授その他の方々によって大きく発展していることは、望外の喜びです。その後私の興味はマルチンゲールの漸近展開へ移ってゆきました。

漸近決定論、漸近展開、確率解析とマリアバン解析の我が国の研究が国際的に最高のレベルにあり、それぞれの分野の碩学でいらっしゃる先生方との出会いが若いときに得られたことは大きな幸運でした。畏友、阪本雄二氏は、研究の初期より大きな力となって共同研究を前進させてくれました。その後、多くの方が、共同研究に参加され、あるいは、研究を発展させて下さいました。このように、多くの献身的な協力に恵まれたことは、私にとってさらなる幸運でした。また、Yu. Kutoyants先生、J. Jacod先生、P. Malliavin先生、Barndorff-Nielsen先生、M. Soerensen教授やヨーロッパネットワークDynstochの人々に温かく迎えられ、大きな支援を頂いたことも忘れることはできません。すべて、統計学と確率論の伝統の恩恵に

違いなく、その発展を支えるすべての皆様に感謝

いたします。

6. 第21回日本統計学会小川研究奨励賞について

6.1 日本統計学会小川研究奨励賞

吉田 朋広 (東京大学)

受賞者氏名：清水 泰隆 氏 (大阪大学)

受賞論文：Density estimation of Lévy measures for discretely observed diffusion processes with jumps, *Journal of the Japan Statistical Society*, 36 (1), 2006, 37-62

確率過程に対する統計推測理論は応用の範囲を広げつつあり、とくに確率微分方程式は確率過程の表現に頻繁に用いられ、その統計理論が必要となっています。連続時間での観測に基づく統計推測は基本的であり、統計モデルに対する尤度比公式や、様々な極限定理が研究され、推定量の一致性、漸近 (混合) 正規性、漸近有効性が証明され、漸近理論が発展してきました。いっぽう、実際の統計データ解析のためには、離散時間での観測を仮定することが現実的であり、サンプリング下、つまり、離散的観測の状況で、統計量の構成とその理論的な解析が重要となります。

離散観測では、尤度比の陽表現は期待できず、その近似としての擬似尤度に基づく解析が行われ、ジャンプのないいわゆる拡散過程に対して理論がとくに発展しています。局所ガウス近似やより高次の近似による擬似最尤型推定量の一致性、漸近正規性が示され、また、擬似ベイズ推定量の同様の性質も知られています。

株価の暴落など、不連続的な現象のモデリングに、ジャンプのある確率微分方程式が重要度を増しています。拡散過程に対する研究を背景に、ジャンプ型の確率微分方程式に対する離散観測に基づく統計推測理論の研究が進行中ですが、拡散過程の場合と本質的に異なる点は、離散観測においてはデータの増分が拡散だけに因るのかジャンプに因るのか確定的でないことです。その解決のた

めに、漸近的なジャンプ/非ジャンプ判別フィルタを構成し、それによってデータ増分を拡散過程の推定関数とジャンプ過程のそれに判別し代入することで、パラメータの推定量を構成し、その漸近正規性が証明できます。そのとき、判別誤差の評価と制御が本質的になります。

清水泰隆氏はジャンプの問題に真正面から取り組み、一連の論文を発表していますが、受賞論文ではとくに、ジャンプのある確率微分方程式のレビ密度推定の問題を扱い、カーネル型推定量を構成し、その平均2乗誤差を評価し、最適収束率を与えました。判別フィルタの閾値を決める必要があり、精密な評価が必要になります。判別フィルタの可能性を明らかにする意義ある結果と言え、他の推定量を構成する上でも示唆に富むものです。

ジャンプ型の確率過程のクラスが含む構造は非常に多様なため、統計推測理論はまだ終結には程遠い状況で、その解析は骨の折れる仕事ですが、多様な現象を踏まえた研究を着実に進めることで大きな成果を得られるよう期待しています。

6.2 受賞のことは

清水 泰隆 (大阪大学)

この度、小川賞受賞という過分なる栄誉を賜りましたことは大変光栄に存じております。歴代に受賞された蒼々たる先生方のお名前を見る限り、私のような未熟者がたんに幸運によって賞をいただいちゃってよいものか不安もございましたが、今後の一層の精進を決意した上で謹んでお受けした次第でございます。

このような幸運に恵まれましたのは、多くの方々からのご支援があつてのことで、特に、恩師である東京大学の吉田朋広先生には、公私に渡って様々な場面でご指導、ご助力を賜り、出来の悪

い弟子にもかかわらず親身になって相談に乗っていただきました。それらのことを思い起こす度に筆舌に尽くせぬ感謝があふれて参ります。この場をお借りいたしまして心より御礼を申し上げます。

実はこの論文は私にとって初の単著論文となったのですが、そのせいもあってか初稿の段階では極めて粗雑で読みづらい論文でした。それにもかかわらず、査読員の方々からはほとんど指導とも言えるほど懇切丁寧なご助言をいただいたことで、何とか論文としての体裁を整えることが出来ました。出来ることなら当時の査読員の方々に直接お会いしてお詫びと御礼を申し上げたきところ、匿名の為そうもいかずにおりました。よい機会を頂きましたのでここに感謝申し上げたいと思います。

さて、対象論文では飛躍型確率微分方程式におけるレヴィ測度の密度推定を離散観測によって行っています。吉田先生と共著で発表したShimizu

and Yoshida (2006, SISP) の中で飛躍判別のための漸近フィルターを提案しておりますが、これは離散観測される飛躍型確率過程を取り扱う際の有力な方法論の一つであり、本研究は、その利用例の一つといえます。フィルターの取り扱いには、まだ実用上の問題点は残されているものの、本研究を通して多くの応用可能性と、新たな研究の芽が見えたような気がします。

今はまだまだ自分のやることに自信を持てず、日々不安の中で研究しておりますが、偉大なる諸先輩方を目標にして、着実に、しかし時には失敗を恐れず大胆に学問の道に邁進し、統計道に不惜身命を貫く所存でございますので、今後とも益々のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴：昭和51年福井県福井市生まれ。東京大学大学院数理科学研究科博士前期課程修了。修士（数理解科学）。大阪大学大学院基礎工学研究科助教。

7. 2007年度統計関連学会連合大会報告

7.1 企画委員会報告

企画委員会委員長 狩野 裕（大阪大学）

統計関連学会連合が連合大会を開催するようになって今回で6回目を迎えます。回を重ねるごとに大会規模はほぼ単調に増大しており、神戸大会も前回の仙台大会を上回る参加者を得ました。具体的には、大会参加者は869名で、その中で学生が197名を占めました。チュートリアルセミナーにも400名近い方々に参加して頂きました。大会初日に台風9号が関東地方を直撃し新幹線が止まり空路もストップしましたが、幸いにもその影響は大きくありませんでした。参加者が増加した理由として日本計算機統計学会と日本行動計量学会が主催学会となったことがあります。加えて、すばらしいハード（大会会場）を準備して頂いた大会実行委員会、スムーズな受付業務に代表される有能な事務局の方々、そして、大会のソフト（プ

ログラム）を担当した企画委員の献身的な働きがあつてのことだと思います。もちろん、我々はあくまで黒子役であつて、大会参加を促すような魅力ある講演を提供して下さったのは主催・協賛学会の会員の皆様であることは言うまでもありません。この場を借りてお礼を申し上げます。

昨今、社会が必要としない組織は存続することはできません。学会も例外ではなく、アクティビティが低くその必要性を訴えることのできない学会は自ら退場を選択することになるでしょう。連合の意義は二つあると思います。一つは、連合することでシナジー効果を生み学会の活性化を図ること、他の一つは統計科学の衆知を集め対外的に情報発信することです。前者は学問が細分化され過ぎたことへの反省とも関連します。これらは時代の流れと考えられ、多くの他の研究分野においても行われています。近い学会同士が互いに牽制する時代ではありません。6学会がそれぞれの特

徴を活かしつつ協業する、それらをスムーズに行うための組織が連合、それらを実現する場が連合大会であると思います。

連合大会を開催することで、少なくとも数の上では、これらの目的を達成しつつあると思います。特に、若い会員が増えていることは頼もしい限りです。しかし、われわれ企画委員会が連合の特質を活かした魅力あるプログラムを編成したかと問われますと、残念ながら自信はありません。会員の皆様のアクティビティの高さに乗っかって受身の仕事をしただけのように思います。やはり、連合の特徴を理解する企画委員がそれを活かした積極的なプログラムを編成すべきではなかったかと反省しています。一つ言い訳をさせて頂くなら、企画委員は良いプログラムを提供するという職務に専念できず、その他の各種の雑務に追われる実態があります。たとえば、講演申込受付システムの構築、多方面からの問合せや依頼への対応等です。今回、これらの業務を軽減させるひとつの手段として冊子体プログラムの作成を取り止め、そして、報告集では索引を廃止しました。

連合大会の目玉に成長した企画にコンペティションセッションがあります。若い会員の皆様に「連合大会で立派な講演をしたい」というモチベーションを高める企画で、審査発表のある閉会式には多くの方々が来て下さいました。コンペティションセッションの実施方法には難しい面があり、当セッションで講演を考えておられる方にはご迷惑をおかけしているかもしれません。今年は3つあったコンペティションセッションで最初のセッションを除いて審査者数が十分でないという問題が生じました。それはコンペティションセッションの並行セッションの中に極めて集客力が高いものがあったからだと考えられます。この種の問題は、昨年度のように事前審査を取り入れ講演件数をしぼり、昼間の並行セッションが無いところで行えば解決するかもしれません。一方、事前審査を取り入れることは講演内容に加えてプレゼンテーションの技術をも評価の対象とする当セッションの趣旨に合致しないこと、そして、事前審

査のための十分な情報と時間を要求します。

吉村功先生による「21世紀に向けての統計科学」と題された論文には『一般の統計学の講義に面白さを感じる学生は極めて少ない。筆者のところに限らず、いろいろな大学の統計の研究室にいる学生、そこを出た学生に、統計を学んだり研究しようとしたきっかけを聞くと、たいていは、先生の個人的魅力、個人的な研究内容紹介をあげる。統計学自体を魅力的な学問だという学生にはめったに会うことがない。』とあります（日本統計学会誌 1999年 第29巻3号, p.358）。この指摘から10年近くを経て状況は改善しているでしょうか。大学教育において、学位（卒業・修士・博士論文）に直結する指導が重要視されるようになった今、多くの学生を育て、そして彼らが社会で活躍することが肝要です。連合と連合大会はこういったことへの取り組みも求められるように思います。

統計科学から見て、学会は次の3つのタイプに分類できると思います。すなわち、(A) 特定の応用分野への指向が強くない学会、(B) 特定の応用分野における統計的方法論を発展させる学会、(C) 特定の応用分野（実質科学）の学会、です。現在の統計関連学会連合は（A）または（B）の学会の連合ですが、今後は、（B）をより充実させ（C）との連携を探る必要があるように思います。

統計関連学会は多くの問題を共有しています。各学会が連合と連合大会を活用することによって、お互いの問題が少しでも解決の方向へ向かうことができればと思います。

7.2 市民講演会報告

谷崎久志・羽森茂之・松林洋一
（神戸大学大学院経済学研究科）

今年度も統計関連学会の社会貢献活動の一環として、一般市民・大学生・大学院生を対象とした市民講演会を開催した。統計データを通して統計学的重要性を一般の方に広く知ってもらうことを目的として、「統計データから見たEUと日本経

済・関西経済について」というテーマ（座長：神戸大経済・谷崎久志，オーガナイザー：大阪大基礎工・狩野裕，神戸大経済・谷崎久志，京都大経済研究所・西山慶彦）で，2007年9月6日（木）17：00～19：00に，経済・経営学部本館102号室（A会場）で，2人の講師に講演をして頂いた。参加費は例年通り無料とした。今年度は，EUインスティテュート関西（<http://euij-kansai.jp/>）の行事の一つとして，共催という形をとってもらった。

最初の報告は，「“戦後最長”景気と日本経済・地域経済」というタイトルで，飯塚信夫先生（日本経済研究センター）にお願いした。報告の要約は，次のようにまとめられる。

今回の景気回復局面は，“戦後最長”になった。その要因として，次の3点が挙げられる。

1. 輸出の伸びは「いざなぎ以来」なのに，円安であった。
2. 売り上げを伸ばしながら，賃金の抑制にも成功，高い利益の伸びを継続した。
3. 設備過剰感の剥落と利益の高い伸びが，“失われた10年”で手控えられていた設備投資を伸ばした。

しかし，今回の景気回復は「輸出依存&リストラ型」とも呼べる特徴を持ち，その結果，産業間の成長率格差を広げることもなった。例えば，1996年から2000年，2001年から2005年の2つの時期を比較すると，後者の方が「伸びる産業は伸び，縮む産業は縮む」という傾向が鮮明であった。さらに，産業間の成長格差は，地域の成長率格差にもつながっている。例えば，平成16年度県民経済計算により，地域ごとの成長率を比較すると，1990年代後半（1996-2000年度）よりも2000年代前半（2000-2004年度）に格差が拡大していることがわかる。

日本経済の先行きに対して，民間調査期間の予測はおおむね楽観的であるが，リスク要因としては，次の3点が指摘できる。

1. 円ドル相場が円高に向かい始めていること。

2. 輸出の伸び率が鈍化しつつあること。

3. 製造業の設備投資に資本ストック循環上の調整圧力があること。

次に，「統計データからみたEUと日本経済・関西経済」という大枠のテーマと同じタイトルで，久保広正先生（神戸大学大学院経済学研究科）に報告をして頂いた。報告内容の要約は下記の通りであった。

EU（欧州連合）は，約半世紀にわたる発展を経て，世界経済の約30%を占める規模にまで拡大しており，加盟国は2007年時点で27ヶ国に達している。EU経済は，1990年代以降，総じて低い成長率を享受しており，域内の統一通貨であるユーロも，その対外価値は低かった。しかしここ数年來，経済成長率は3%近くにまで上昇し，ユーロも増価傾向にあり，EU経済の活力は，まさに開花期を迎えた感が強い。

同地域における経済活力の源泉は，マクロ経済面での特徴（所得格差の低さ，財政赤字の低さ）のみならず，産業立地の特異性という構造的側面にも起因している。研究開発，情報産業など，規模の経済性が強く働く分野は，ドイツ，フランスといったEUの中核を成す国に集中している。他方，加工，組立産業に代表される，規模の経済性が相対的に低い分野は，旧東欧諸国などの周辺国に分散化されつつある。このような「産業の集中と分散」というメカニズムは，EU経済の中長期的な発展の原動力となっており，地盤沈下が喧伝されるわが国の地域経済，とりわけ関西経済の将来を展望するうえでも，学すべき点は多い。

今日，わが国経済とEU経済は，モノの取引（貿易）のみならず，おカネの取引（投資）を通じて着実に強化されつつある。両地域の関係を，貿易，投資といった経済的関係のみならず，ヒトの交流，知識の交流へと深化させていくためにも，EUに関する研究教育拠点の役割，責務は大きい。神戸大学を中核とする「EU インスティテュート関西」の活躍に期待したい。

各講演の後、質疑応答が行われ、盛会のうちに市民講演会を終了した。しかし、昨年度に比べて、参加者が少なかったのが少し残念であった（昨年度は約200名、今年度は約60名）。市民講演会の参加者数が少なかった理由の一つは、今年度の場合、チュートリアルセッションと時間帯が重なったことが考えられる（例年は、チュートリアルセッションと市民講演会とが重ならないように時間割が組まれている）。これは来年度への検討課題としたい。

7.3 チュートリアルセミナー報告

繁桙 算男（東京大学）

樋口 知之（統計数理研究所）

上坂 浩之（日本イーライリリー）

今年度のチュートリアルセミナーの開催に当たって、学会員からテーマを募ることとなった。今回3テーマを実施したが、1テーマは応募いただいたものである。広く会員から希望テーマを出していただくことにより、より会員に密着したチュートリアルセミナーを企画できるものと思う。例年と異なり、本年のセミナーは2時間30分のテーマ2つをまとめて1コース、5時間のテーマを1コースとする2コースを並行して実施した。関東地方を台風が直撃するという状況にも関わらず、225名収容の教室のいずれもが満席に近い状況であった。多くの方のご聴講をいただいたことにお礼申し上げます。

テーマ1：ベイズ統計とベイジアンネットワーク
オーガナイザー：繁桙算男

（東京大学総合文化研究科）

講師：繁桙算男（東京大学総合文化研究科）、植野真臣（電気通信大学）、本村陽一（産業技術総合研究所）

本チュートリアルは、現在注目されており、すでに多くの分野で実際に使われているベイジアンネットワークモデルについて、専門的に勉強をし

たことのない方に対し、基本的な考え方を説明し、実際に役に立つシステムを作るノウハウを紹介することを意図したものである。このチュートリアルは3人の講師が担当した。まず、繁桙がベイジアンネットワークモデルに基づく分析において、なぜ、ベイジアン的アプローチが必要であるかを説明した。複雑な現象をグラフで表現し、さらに、データによって、そのモデルを改良し、実際の問題解決に用いるという一連のプロセスにおいて、ベイズ的な考え方はなにしろ相性がいいのである。次に、植野真臣氏が、データによる学習、すなわち、条件付確率のパラメータの推定や、パスの取捨選択というモデルの改善について、自身の研究成果を踏まえていろいろな方法を講義された。最後に、本村陽一氏が、ベイジアンネットワークのモデリングと学習の基本的な部分を復習した上で、実際的なシステムを作る過程を自らの体験に基づいて説明された。全体を通じて、基本的発想、問題解決にかかわる事象に対する理解と選択肢の整理をつなげることによって、役に立つシステムをつくる道筋をつけることを心がけたつもりである。

テーマ2：大規模データ解析の現状と問題点

オーガナイザー：樋口知之（統計数理研究所）

講師：樋口知之（統計数理研究所）

複雑なシステムが不断に生み出す大量のデータの解析処理、そこからの有用な情報の自動的な抽出、つまり計算機による知識獲得の重要性が叫ばれて久しいが、統計科学がこの要求に満足に答えてきたのか、特にデータマイニングや機械学習等の他隣接研究領域と比較して十分であったのかは自省すべき時期にきている。このような背景のもとで、統計関連学会関係者の奮起に大いに期待する意図もあり、本セッションはオーガナイザーの樋口が講師も務めた。いわば一人独演会的な企画であったが、台風が関東を直撃し諸々の交通機関がマヒした中、比較的広めの部屋がいっぱいになるくらい大勢の方にご聴講いただき、この場を持ってあらためて感謝申し上げます。

本チュートリアルでは、統計科学の研究者が大量データの解析にあたって障害となる、欠損値や異常値の取り扱い等の前処理技術から、ベイジアンモデリングを利用した異種情報の統合手法までを、講師の多数の実例経験をおりまぜて紹介した。前半部分では、大規模データ解析周辺の現状分析と数理的基礎の解説を行い、また後半では、人工衛星時系列データ、GPSデータ、POSデータ、マイクロアレイデータ等の解析例を図説する中で直面した困難をいかに克服していったかを紹介した。講師の時間配分ミスにより、後半部分がトピックス紹介程度にしかならなかったことを申し訳なく思う。

大規模データ解析ができる人材は日本ではかなり少数であるため、近い将来、大規模データ解析手法に係わる諸関連研究分野が融合の上一つの領域を冠した研究分野に発展していき、そこにおいて人材育成が効率よく行えるようになることを切に願っている。

(スライドが次のURLから入手可能)

<http://daweb.ism.ac.jp/articles/Tutorial07HiguchiBW.pdf>

テーマ3：生存時間解析における競合危険モデル入門

オーガナイザー：上坂浩之(日本イーライリリー)

講師：西川正子(国立保健医療科学院・技術評価部)

生存時間解析は、ある個体あるいは対象を経時的に観察し、注目している事象が発生するまでの時間を解析の対象とする。このとき注目している事象以外の原因、すなわち競合危険によるセンサリングの発生が問題になる。医学・生物学データの解析ではしばしば競合危険因子間の独立性が仮定されるが、この仮定は多くの場合データから確認できない。また生存関数の推定ではKaplan-Meier推定量がよく用いられるが、競合危険因子が存在する場合、Kaplan-Meier推定量は妥当でないことが知られている。

このセミナーでは、生存時間解析の基礎事項を

振り返った後、医療における医薬品やその他の治療法または予防法の有効性・安全性評価の場面を中心として、競合危険を考慮すべき状況、統計的モデルとその推測法が分かりやすく解説された。また、競合危険因子を考慮すべき状況の例が、実際の臨床試験を引用して具体的に紹介された。

大変多くの方が聴講され、225人を収容できる講義室も満員の盛況であった。医薬・医学における事象までの発生時間を扱うデータの解析において、競合危険を考慮すべき状況は多いと考えられるが、本セミナーで紹介されたような競合危険を考慮した解析はまだまだ少ないようである。本セミナーによって競合危険モデルの活用が促進されることを期待する。

7.4 コンペティション講演報告

企画委員・コンペティション担当責任者

富澤 貞男(東京理科大学)

統計関連学会連合大会のコンペティション講演は今年で5回目であります。対象者は、平成19年4月1日時点で満30歳未満のいわゆる若手研究者(大学院生、教員等を問わない)です。大会における連名講演の場合は、コンペティション対象者は実際に口頭発表した方としました。

昨年は事前審査を取り入れ講演数を絞りましたが、今年は、事前審査を行わずに、一昨年までと同様にコンペティション講演を申し込まれた方全員に大会当日講演をしていただきました。理由は、コンペティション講演を目標に研究をされてきた皆さんに講演をしていただき、自分の研究そして自分自身を多くの聴衆の方々知ってもらうことが若手の方にとっては大切であると考えたからです。

大会における審査方法については、昨年と同様の方法で、コンペティションセッションの参加者の自主記名投票に基づき、企画委員会で選考することにしました。自主記名投票での評価は、A、B、Cの3段階評価を用いました。ただし、講演者ならびに共著者は自身への投票は出来ないこと

にしました。

評価は、研究内容のみならず、発表者各自が工夫をして、うまく内容を伝えられたか、質問に的確に答えられたかという発表の仕方も含め、全体としての素晴らしいプレゼンテーションになっているかを評価の対象としました。

コンペティションセッションは9月7日（金）の午前、午後（1）、そして午後（2）と同じ会場（A会場）で行われました。講演数は17件でした。有効投票数は、最も多い講演者で95票、最も少ない講演者で32票でした。審査は、Aを2ポイント、Bを1ポイント、Cを0ポイントとし、講演者毎に有効投票数で平均点を算出しました。選考は、これらの点数に基づき、企画委員会で行いました。その結果、1位と2位の方の差が殆ど無く、企画委員会で検討しまして、今年度に限って最優秀報告賞は2名に授与することにしました。優秀報告賞は例年通り2名に授与することにしました。2007年度統計関連学会連合大会の最優秀報告賞は、廣瀬善大さんと深澤正彰さんに、優秀報告賞は、小泉和之さんと田栗正隆さんに決定いたしました（講演順）。受賞者の皆様には、閉会式（表彰式）にてそれぞれ賞状と副賞が贈呈されました。

コンペティション講演をされました皆さんが、研究内容や発表の仕方等、素晴らしいプレゼンテーションでありました。昨年のコンペティション報告にも書きましたが、連合大会のような大変権威ある大きな学会でコンペティション講演することは、受賞する、しないにかかわらず、若手の皆さんにとって大変に有益であり、今後の研究活動への大きな励みになると思います。若手によるコンペティション講演は、毎年、大変多くの方が関心を持って注目しております。多くの方に自分（自分の研究と自分自身）を知ってもらい、又とない絶好のチャンスであります。

権威あるジャーナルへ論文を掲載することは重要なことですが、それとともに、若手の皆さんにとって、多くの方から一躍注目される立派なコンペティション発表をすることも大変に重要

なことであります。今回コンペティション講演をされました方の中から、将来世界のトップクラスの統計研究者が誕生するものと確信しております。これからも若手の皆さんには、是非コンペティション講演を考えていただきたいと思います。

最後に、コンペティション講演を申し込まれました若手研究者の皆様、座長の先生方、審査に参加されました皆様、そして、コンペティション講演に関する準備等いろいろとご尽力いただきました大会運営関係者の方々へ心よりお礼申し上げます。

コンペティション受賞者のことば

[1] 最優秀報告賞

廣瀬 善大(東京大学大学院情報理工学系研究科)

この度は統計関連学会連合大会コンペティション部門において最優秀報告賞に選んでいただき、ありがとうございます。栄誉ある賞を頂けたことを大変光栄に思います。コンペティションの企画・運営に携われた方々、そして私の講演を審査してくださった皆様に厚くお礼を申し上げます。また、平素よりご指導くださる方々にも感謝申し上げます。

今回の発表では、Efronらにより提案されたLeast Angle Regression (LAR) という手法に対する、双対平坦空間における情報幾何の手法を用いた拡張について発表をいたしました。LARは、線形回帰問題に対する変数選択・パラメータ推定の手法のひとつで、ユークリッド空間において推定量を動かすアルゴリズムと考えることができます。今回はユークリッド空間よりもより一般的な双対平坦空間において、測地線とダイバージェンスを用いてLARの拡張を考えました。その際、推定量の動かし方に変更を加え、双対平坦空間においても動くようにアルゴリズムを修正しました。拡張されたLARは一般化線形回帰問題に対する変数選択・パラメータ推定の手法になります。

発表の方法については、拡張されたLAR及びEfronらにより提案された元々のLARそれぞれの

手法のイメージをしっかりと持っていただけるよう心がけました。そのために、数式はあまり用いずに、図によって視覚的に理解できるように工夫をしました。結果としてよい評価をいただけたことを嬉しく思っています。

まだまだ未熟な私ではありますが、今後もこの賞を励みとして日々の研究に取り組んで参りたいと思います。これからもご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

[2] 最優秀報告賞

深澤 正彰（東京大学大学院数理科学研究科）

このたび最優秀報告賞を頂き大変光栄です。コンペティション講演という機会を設けてくださった企画・運営の先生方、講演を聴きにきてくださり、審査に参加して頂いたみなさま、ありがとうございました。また常日頃より御指導頂いている吉田朋広先生をはじめ、研究分野の先頭に立たれる先生方から、これまでに頂いた貴重なコメントの数々に、この場を借りて感謝致します。

今回の報告では「エルゴード的拡散過程，セミマルコフ過程に対するエッジワース展開・ブートストラップ」というタイトルで、連続時間で定義された確率過程に対する高次漸近理論における幾つかの結果を発表させて頂きました。この分野は近年、数理ファイナンスへの応用を念頭に注目を浴びており、今後も発展を続けるものと考えております。

プレゼンテーションに関しては、他の研究分野の方々を想定して、理論的結果の詳細を説明するよりも、具体的な例を通して、結果のニュアンスを伝えられるよう準備しました。会場の環境について予備知識がなかったので、文字の大きさ、配色に注意しました。時間の制約から、結果のすべてを紹介できず、聴きに来てくださった方々の御期待に沿えない部分があったかもしれませんが、申し訳なく思っています。

コンペティションセッションを含め、今回の統計関連学会連合大会では多くの刺激的な講演を拝聴でき、講演内容のみならずプレゼンテーション

の方法についても多くを学ぶことができました。今回の貴重な経験を糧に、一層精進を重ねて行きたいと考えています。みなさまには今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い致します。

[3] 優秀報告賞

小泉 和之（東京理科大学大学院理学研究科）

統計関連学会連合大会優秀報告賞を頂き大変光栄に思います。本研究を進めるにあたって指導して頂いた瀬尾 隆先生（東京理科大学准教授）に深く感謝いたします。また、研究を支えてくれた研究室のメンバー、日頃からお世話になっているすべての方々に感謝いたします。

今回の発表では、2つの母集団の分散共分散行列に一樣構造モデルを仮定し、さらに、得られた標本に欠測データが生じた場合の、2つの平均ベクトルの同等性検定問題を考えました。一樣構造モデルはデータ間に独立性の仮定がなく、全てのデータ間に一定の相関があるようなモデルで、繰返し測定などでよく見られるモデルです。その一樣構造モデルのもとで一標本問題の平均成分に関する研究は、これまでに数多く考えられてきました。また、観測データが何らかの原因で観測されない欠測値を含む状況においても、EMアルゴリズムなどで代表されるように数多くの研究があります。しかし、そのほとんどは漸近的な理論であり、正確な分布のもとでの議論はあまりない状況です。自分はそこに大変興味があり、研究を進めています。それらの正確な分布の議論は、一標本問題のもとでさえ少なく、多標本の問題にいたってはほとんどありません。そういった観点から自分自身の研究は有用であると考えていますし、自分自身そんな研究が楽しいと思っています。

最後になりますが、統計学は、比較的新しい学問ですので、学生にも開拓の機会が多く与えられています。また、自分自身そうであったように、貴賞は統計学への挑戦を学生が意識するきっかけになっていくと思います。私自身は、今回の大会を通じて様々な分野の講演に多くふれ、今後の研究の励みになりました。新しい学問だからこそ、

いろいろな視点からみた研究が多くあるので今後もこのような場が多く設けられることを期待しています。そして、今回の貴重なコンペティション講演を企画・運営していただいた関係者の方々、審査に参加いただいた方々に改めて御礼申し上げます。

[4] 優秀報告賞

田栗 正隆（東京大学大学院医学系研究科）

この度は、統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞をいただき、誠に有難うございました。大変光栄なことで、非常に嬉しく思っております。今回の受賞は私一人の力ではなく、日頃よりご指導いただいている大橋靖雄先生、松山裕先生をはじめ、お世話になっている周囲の方々のお蔭であり、心より感謝いたします。また、本研究のために貴重なデータを提供して下さったJDC Studyの関係者の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

今回の研究では、調査票により食品摂取量を測定する場合の測定誤差を考慮した上で、食品摂取量と疾患発症との関連について検討を行いました。その際に、報告バイアスを補正する代償としての推定精度の低下に対して、Hierarchical Regression Modelを適用し、安定した推定を試み

ました。シミュレーション実験の結果、提案した方法はバイアスが小さく、通常の方法と比較してよりMSEの小さな推定が可能となることが示されました。また、大規模臨床試験であるJDC Studyデータに提案する方法を適用した結果、提案した方法は既存の方法と比較して顕著に狭い信頼区間を与えることが分かりました。測定誤差の補正による推定精度の低下は、多曝露なデータが得られる栄養疫学の分野においては重要な問題と考えられますが、本研究ではその解決に向けての一つの成果が出せたのではないかと思います。

プレゼンテーションでは、現実の問題とその統計的問題としての定式化、およびその解決法について、他分野の方々にも理解していただけるような分かりやすい発表を心がけました。スライドの作成や発表練習の過程では、研究室の関係者の方々に根気よくお付き合いいただき、皆様のアドバイスを受けて自分なりに工夫・改善を重ねました。今回のコンペティションを通じて、非常に貴重な経験が出来たと感じています。

今後はこのような立派な賞に恥じぬよう、なお一層の努力を重ね、研究に精進していきたく思います。今後とも、よろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

8. 2008年度統計関連学会連合大会について

2008年度統計関連学会連合大会は、2008年9月（日程未定）に、慶応義塾大学・理工学部（矢上キャンパス）で開催されることが決まっております。

詳細については次号に関連記事を掲載する予定です。

9. 第75回日本統計学会総会報告

日時：2007年9月8日（土）12：40～13：40
場所：神戸大学 経済・経営学部本館102号室

司会進行の田中勝人理事長より開会の挨拶がなされた。

1. 会長挨拶：

北川源四郎会長より挨拶がなされた。

2. 議長選出：

議長として栗原考次会員が選出された。

3. 2006年度事業報告・同決算報告、および会計監査報告：

駒本文保庶務会計担当理事より、資料（付表）

2006 年度事業報告

(2006. 4. 1～2007. 3. 31)

- 日本統計学会第 74 回大会の開催
2006 年 9 月 5 日～8 日の 4 日間にわたり、統計関連学会連合大会の一環として東北大学内キャンパスにおいて開催した。
- 第 74 回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集として発行した。
- 日本統計学会春季集会 2007 の開催
2007 年 3 月 10 日に東京理科大学神楽坂キャンパスにおいて春季集会を開催した。
- 会誌の発行
欧文誌 2 号 [Vol. 36 No. 1 (6 月), No. 2 (12 月)], 和文誌 2 号 [第 36 巻シリーズ] 第 1 号 (9 月), 第 2 号 (3 月) を発行した。
- 会報の発行
No. 127 (4 月), No. 128 (7 月), No. 129 (10 月), No. 130 (1 月) を発行した。
- 賞の授与
第 11 回日本統計学会賞 (2 名)、第 2 回日本統計学会統計活動賞 (1 件)、第 2 回日本統計学会統計教育賞 (2 件)、第 20 回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。
- 日本統計学会 75 周年記念事業の実施。
国際研究集会 (1 件)、研究集会 (2 件)、サテライトミーティング (6 件) 他 の記念事業を実施した。
- 研究部会の活動
次の研究部会が活動した。
「高次元データ解析法の開発と評価に関する研究」(若木宏文主査: 2004 年 12 月発足, 2006 年 11 月終了)
「統計教育に関するカリキュラムと教育コンテンツの国際比較」(竹内光悦主査: 2005 年 12 月発足, 2007 年 11 月終了予定)
次の研究部会が発足した。
「マーケティングへの統計科学アプローチ研究部会」(黒井伸彦主査: 2006 年 12 月発足, 2008 年 11 月終了予定)
9. 研究分科会の活動
次の研究分科会が活動した。
「統計教育部会」(村上征勝主査: 2002 年 12 月発足, 2006 年 11 月終了)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(山本 拓主査: 2002 年 12 月発足, 2006 年 11 月終了)
「統計コミュニケーション研究分科会」(杉山高一主査: 2002 年 12 月発足, 2006 年 11 月終了)
次の研究分科会が継続して活動することとなった。
「統計教育部会」(渡辺美智子主査: 2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(国友直人主査: 2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
10. 各種委員会の活動
評議員会、理事会、その他の各種委員会を開催した。
- その他
g) 評議員選挙、会長選挙を実施した。
gi) 国際交流を推進した。
gii) サーバを移行し、インターネット経由での情報発信を促進した。英文のホームページを充実した。
giv) 統計関連学会連合の事業推進に協力した。
vi) 入会者拡大の方策を検討・実施した。
vii) 会誌購読拡大の方針を検討・実施した。
viii) 学会誌のバックナンバーを電子ジャーナル化するための準備を進めた。
ix) 日本統計学会研究業績賞を新設した。

会計監査報告書

2007 年 7 月 18 日

日本統計学会公開第 22 条に基づき、2006 年 4 月 1 日より 2007 年 3 月 31 日までの会計処理を監査した結果、決算書の通り相違ないことを認めます。

監事

瀬 尾 隆
久保 達也

2006 年度決算

(2007 年 3 月 31 日現在)
(単位 円)

(i) 貸借対照表

科目	借 方		貸 方	
	期首	期末	科目	期首
固定資産	1,962,625	180,471	学会自己資金	1,962,625
流動資産	11,639,307	12,817,692	学会活動積立金	5,000,000
現金	31,195	76,177	役員旅費補助積立金	200,000
振替口座	1,633,035	2,073,035	名簿作成積立金	600,000
預貯金	9,975,077	10,668,480	O A 機器積立金	1,100,000
			未払い金	2,731,765
			繰越金	2,434,278
計	13,601,932	12,998,163	計	13,601,932

(ii) 収入

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
今期繰入金		2,434,000 _a	2,434,278
未払い金繰り入れ		2,605,000	2,605,029
学会活動積立金取崩		0	0
OA 機器積立金取崩		0	0
役員旅費補助取崩		100,000	0
名簿作成積立金取崩		0	0
会費収入	名譽会員・正会員 学生会員 週及請求分	10,894,000 10,000,000 294,000	11,202,000 10,084,000 _b 273,000
賛助法人費		600,000	845,000
団体会員費		1,200,000	1,480,000 _b
科学研究費補助金		160,000	160,000 _b
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」		1,000,000	1,000,000
雑収入	雑誌購読料 利子収入 広告収入 その他	1,901,000 700,000 1,000 1,200,000	1,889,809 531,000 _b 4,885 _b 1,115,000 _b
大会開催費		0	238,924 _b
75 周年記念事業準備金返還		0	0
計		500,000	500,000
		20,794,000	21,271,116

(iii) 支出

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
印刷費	会誌未払い分 (J35-2)	9,894,000	10,551,103
	会誌(36-1,J36-1,36-2)	1,472,000	1,450,594
	未払い金 (J36-2)	6,200,000	4,555,926
	会報 (127号～130号)	0	2,486,595
	名簿印刷費 (未払い分)	1,000,000	832,000 ^{a)}
	その他	822,000	680,000
通大会開催費	分担金	40,000	28,000
	総額金	0	0
研究会費	研究分科会	300,000	200,000 ^{a)}
	常学連営合費	100,000	40,000 ^{a)}
経費	評議員会	410,000	189,948
	特別委員会	110,000	89,464
	統計教育委員会	40,000	0
	会誌編集委員会	20,000	0
	理事会	40,000	0
	その他	200,000	100,484
事務費	一般事務人件費	1,910,000	1,257,503
	校正編集事務人件費	800,000	635,400
	発送事務人件費	200,000	105,000
	事務用品	300,000	223,990
	事務室借料	250,000	80,911
	その他	240,000	92,808
学会事務業務委託費	通信・郵送費	120,000	119,394 ^{a)}
	会誌未払い分 (J35-2)	2,340,000	2,340,000
	会誌(36-1,J36-1,36-2)	2,111,000	2,512,868
	未払い金 (J36-2)	161,000	160,710
	会報 (127号～130号)	680,000	454,760 ^{a)}
	名簿送料 未払い分	0	245,170
役員旅費補助	その他通信・郵送料	720,000	414,950
	各種分担金	150,000	150,465
	日本経済学会連合	400,000	1,086,813 ^{a)}
	I S I	100,000	49,960
	横断型連合	35,000	125,000
	統計関連学会連合分担金	28,000	35,000
ネットワーク維持費	サーパー移動費	0	0
	電子ジャーナル化準備費	100,000	0
	国際交流促進費	150,000	44,186
	事務局移動準備費	100,000	187,367
	名簿作成積立金	200,000	300,000
	予備費	300,000	259,254 ^{a)}
繰越金	繰越金	2,516,000	3,185,927
	計	0	21,271,116
		20,794,000	21,271,116

(2006 年度決算 注)

- 事務局の移転に伴い、什器・備品類を除却 (795,500 円) した。また故障に伴い、サーバーを除却(986,654 円)した。
- 予算の方は千円未満四捨五入。貸借対照表参照。
- 新入会員分 (62 名) を含む。
- 賛助法人 17 件。賛助法人費は入会時の正会費の 10 倍を 1 口とし、賛助法人費を値上げしていない。従って、各社 1 口の会費は異なる。
- 団体会員 4 件 (1 件 40,000 円)。
- 定期購読国内販売およびバックナンバー売上。
- 財団法人統計情報研究開発センター名義の利息含む。
- 名簿の広告掲載料含む。
- 出版者著作権協議会・科学技術振興機構より入金、連合大会送料返金。
- 127 号 21 頁, 128 号 16 頁, 129 号 34 頁, 130 号 23 頁 計 94 頁。
- 会誌、会報発送用の角 3 封筒、定型封筒、選挙の印刷物および総会資料等。
- 「統計教育に関するカリキュラムと教育コンテンツの国際比較」研究部会、「マーケティングへの統計科学アプローチ」研究部会。
- 「統計教育」分科会、「計量経済・計量ファイナンス」分科会。
- 事務局員の交通費および大会時宿泊費。
- 寄贈、国内会誌販売のための送料は含まない。
- 新入会員への名簿・会誌・会報等の送料、重要書類の書留料、電話・F a x 代、振込手数料、寄贈・会集のための送料、評議員への送料、重要書類の書留料、電話・F a x 代、振込手数料、寄贈・会誌販売のための送料、理事への宅配便、アルバイトの交通費等。
- 招待者の大会参加費負担分、春季集会開催費用。

2007 年度事業計画

(2007.4.1～2008.3.31)

1. 日本統計学会第 75 回大会の開催
2007 年 9 月 6 日～9 日の 4 日間にわたり、神戸大学六甲キャンパスにおいて開催する。今年も統計関連学会連合大会の一環として開催する。
2. 第 75 回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行
欧文誌 2 号[Vol. 37, No. 1 (6 月), No. 2 (12 月)], 和文誌 2 号[第 37 巻シリーズ J 第 1 号(9 月), 第 2 号(3 月)]を発行する。
4. 会報の発行
No. 131 (4 月), No. 132 (7 月), No. 133 (10 月), No. 134 (1 月) を発行する。
5. 賞の授与
第 12 回日本統計学会賞、第 3 回日本統計学会統計活動賞、第 3 回日本統計学会統計教育賞、第 1 回日本統計学会研究業績賞、第 21 回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
6. 春季集会の開催
今年度も 2008 年 3 月を目処に、日本統計学会春季集会を開催する。
7. 研究部会の活動
「統計教育に関するカリキュラムと教育コンテンツの国際比較」(竹内光悦主査：2005 年 12 月発足, 2007 年 11 月終了予定)
「マーケティングへの統計科学アプローチ研究部会」(照井信彦主査：2006 年 12 月発足, 2008 年 11 月終了予定)
2007 年 12 月に活動を開始する部会を募集する。
8. 研究分科会の活動
「統計教育部会」(渡辺美智子主査：2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(国友直人主査：2006 年 12 月発足, 2010 年 12 月終了予定)
新規に活動を開始する分科会を随時募集する。
9. 各種委員会の活動
評議員会、理事会、その他の各種委員会を開催する。
10. その他
 - i) 会員名簿を発行する。
 - ii) 国際交流を推進する。
 - iii) インターネット経由での情報発信を促進する。英文ホームページを充実させる。
 - iv) 統計関連学会連合の事業推進に協力する。
 - v) 入会者拡大の方策を検討・実施する。
 - vi) 会誌購読拡大の方針を検討・実施する。
 - vii) 学会誌のバックナンバーを電子ジャーナル化するための準備を進める。



<2007年度予算>

(2007年4月1日現在)
(単位 円)

(i) 貸借対照表

借 目	方 期		貸 目		方 期	
	科	首	科	首	期	首
固定資産		180,471	学会自己資金		180,471	
流動資産		12,817,692	学会活動積立金		5,000,000	
現金		76,177	役員旅費補助積立金		200,000	
振替口座		2,073,035	名簿作成積立金		600,000	
預貯金		10,668,480	O A機器積立金		1,100,000	
			未払い金		2,731,765	
			繰越金		3,185,927	
計		12,998,163	計		12,998,163	

(ii) 収入 (単位 千円)

科 目		細 目	
今 期	繰 入 金		
	未払い金繰り入れ	3,186	3,186
	学会活動積立取崩	2,732	2,732
	O A機器積立金取崩	500	500 ¹⁾
	役員旅費補助取崩	0	0
	名簿作成積立金取崩	100	100
	名簿作成積立金取崩	600	600
会 費 収 入		11,280	
			名譽会員・正会員 学生会員 週及請求分
			10,000 280 1,000
	費助法人費	1,480	1,480
	団体会員費	160	160
	科学研究費補助金 〔研究成果公開促進費学術定期刊 行物〕	1,000	1,000
雑 収 入			
		1,905	会誌購読料 利子収入 広告収入
			700 5 1,200 ²⁾
	75周年記念事業委員会和文 誌出版助成金	1,000	1,000 ³⁾
計		23,943	23,943

(2007年度予算 注)

- 1) 日本統計学会和文誌2007年9月号及び2008年3月号での特集企画に伴うページ増を見込んだ、印刷費確保のための取崩。
- 2) 会報の広告掲載費1000千円、名簿広告掲載費200千円。
- 3) 日本統計学会和文誌2007年9月号及び2008年3月号における、75周年記念特集企画に伴うページ増に対する印刷費助成。

(iii) 支出

(単位 千円)

科 目		細 目	
印 刷 費		13,137	
			会誌未払い分 (36巻12号) 会誌 (37巻 1, 2, J1, J2号) 会報 (131～134号) 名簿印刷費 その他
			2,487 8,160 ⁴⁾ 1,000 830 660 ⁵⁾
大会開催費		140	
			春季集会所開催費 懇親会
			100 40 ⁶⁾
研究部会費		300	
研究分科会費		100	
学会運営会合費		410	
			評議員会 特別委員会 統計教育委員会 会誌編集委員会 理事会
			110 40 20 40 200
事 務 費		1,230	
			一般事務人件費 校正編集事務人件費 発送事務人件費 事務用品 事務室借料 その他
			650 120 250 100 100 10 ⁷⁾
学会事務業務委託費		2,340	
通信・郵送費		2,965	
			会誌送料 会誌送料未払い分 (36巻12号) 会報送料 名簿送料 その他通信・郵送料
			680 245 720 150 1,200 ⁸⁾
役員旅費補助 各種分担金		100 227	
			日本経済学会連合 I S I 機関型連合 統計関連学会連合
			35 102 ⁹⁾ 50 40
ネットワーク維持費		62	
国際交流促進費		100	
事務局移転準備費		200	
名簿作成積立金		300	
予 備 費		2,302	
計		23,943	23,943

(2007年度予算 注 続き)

- 4) 欧文誌特別号の印刷経費は含まない。
- 5) 会誌と会報などの発送用封筒や入会のお誘いの印刷、春季集会所稿集など。
- 6) 学会四賞 (統計学会賞、研究業績賞、統計活動賞、統計教育賞)、小川賞の懇親会招待分。
- 7) 事務員の交通費。
- 8) 名簿記載事項返送時郵送料の受取人払い費用を含む。
- 9) 2005年度分、2006年度分未払い費を含む。
- 10) ドメイン使用料、学会サーバー委託費。

に基づいて事業報告案および決算報告案の説明があり、引き続き久保川達也監事より会計監査報告がなされ、承認された。

4. 評議員会からの報告：

北川源四郎会長より、2006・2007年度第3回評議員会（9月6日開催）での議事に関して報告があり、学会各賞の受賞者の決定、学会賞の規程と運用方針に関する議論、についての報告があった。

5. 2007年度事業計画・同予算：

川崎能典庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて事業計画案・同予算案の説明がなされた。事業計画案中の記載誤り2点を訂正の上、承認された。（付表は訂正済。）

6. 第76回大会について：

北川源四郎会長より、2008年度第76回大会を、慶応義塾大学理工学部（矢上キャンパス）において、2008年9月8日から13日の間で、例年通り4

日間の会期で開催する予定であることが報告された。

7. その他：

田中勝人理事長より、理事の交代に関して下記の報告があった。

駒本文保理事（庶務会計）の退任に伴い、倉田博史会員が新たに庶務会計担当理事に就任し、川崎能典理事が庶務・会計責任者となる。また、今野良彦理事（大会事務局）の退任に伴い、橋本紀子会員がその後任として、谷崎久志理事（広報・会報）の退任に伴い、福地純一郎会員がその後任として、それぞれ新たに理事に就任する。

以上をもって総会は終了し、引き続き、第12回日本統計学会賞、第3回統計活動賞、第3回統計教育賞、第1回研究業績賞、第21回日本統計学会小川研究奨励賞の授賞式が行われた。更に続いて、日本統計学会75周年記念出版賞の授賞式が行われた。

10. 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき年間10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2007年10月31日

応募先：

〒107-0062

東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2階
財団法人 統計情報研究開発センター内
日本統計学会事務局

Tel & Fax: 03-5467-0483

E-mail: shom@jss.gr.jp

応募書類の書式などは応募先までお問い合わせください。採否は、12月に開催予定の評議員会にて審議の上、決定いたします。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿（2006年3月）の記載または学会ホームページをご参照ください。

11. 公募情報

●研究員募集：独立行政法人理化学研究所 次世代計算科学研究開発プログラム 次世代生命体統合シミュレーション研究推進グループ

1. 募集研究室

次世代計算科学研究開発プログラム

次世代生命体統合シミュレーション研究推進グループ データ解析融合研究開発チーム

2. グループの概要

理化学研究所は、平成18年度より世界最高水準の演算性能の実現を目標に、次世代スーパーコンピュータの開発を行っている。

次世代生命体統合シミュレーション研究推進グループは、次世代スーパーコンピュータのためのグランドチャレンジとして提案されている次世代生命体統合シミュレーション研究開発の実施主体である。平成18年10月に発足し、次の4チームで構成されている。

- 分子スケール研究開発チーム
- 細胞スケール研究開発チーム
- 臓器全身スケール研究開発チーム
- データ解析融合研究開発チーム

(参考)

次世代スーパーコンピュータプロジェクト

<http://www.nsc.riken.jp/>

生命体統合シミュレーション研究委員会

<http://www.riken.jp/bls/>

3. 募集職種、募集人数及び職務内容

職 種：研究員

人 数：若干名

職務内容：次世代生命体統合シミュレーションアプリケーションの研究開発

4. 応募資格

数値計算または数値解析の経験を持ち、ライフサイエンスのデータ解析と次世代生命体統合シミュレーションアプリケーションの研究開発を意欲的に進められること。

博士号を取得していることが望ましい。

5. 勤務地

事業所名及び住所：

独立行政法人理化学研究所 横浜研究所

(神奈川県横浜市鶴見区末広町1丁目7-22)

または、東京大学医科学研究所内

(東京都港区白金台4-6-1)

6. 待 遇

年度契約の任期制職員で、評価により更新可能。

給与は、経験、能力、実績に応じた年俸制で、通勤手当、住宅手当の支給有り。社会保険の適用有り。

休日は、土日、祝日、年末年始(12/29-1/3)、当研究所設立記念日。

その他、当研究所規程による。

7. 応募方法及び締切日

[提出書類]

- (1) カバーレター
- (2) 履歴書(顔写真貼付のこと)
- (3) 研究歴
- (4) 研究業績一覧
- (5) 推薦書1通
- (6) 今後の研究開発活動についての抱負(これまでの研究開発をふまえて)
- (7) 主要論文の別刷り又はコピー(3編以内)

[締切日]

採用決定次第締め切ります。

[個人情報の取扱について]

提出された書類は、独立行政法人理化学研究所個人情報保護規程に則り厳重に管理し、採用審査の用途に限り使用されます。

これらの個人情報は正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することは一切ありません。

8. 選考方法

書類選考後、面接。

9. 着任時期

採用決定後、できるだけ早い時期。

10. 備考

応募書類は原則として返却しません。

11. 問合せ先・書類送付先

〒100-0005

東京都千代田区丸の内2-1-1 明治生命館6F

独立行政法人理化学研究所 次世代計算科学研究
開発プログラム 企画調整グループ 採用担当
封筒に「研究員応募書類在中」と朱書き、書
留等で郵送のこと。

TEL：048-462-1365

FAX：03-3216-1883

e-mail：ngcr-recruit@riken.jp

●研究員募集：独立行政法人理化学研究所 遺伝子多型研究センター 情報解析研究グループ 統計解析研究チーム

独立行政法人理化学研究所 横浜研究所 遺伝子多型研究センター (<http://www.src.riken.jp/>) 情報解析研究グループ統計解析研究チーム（チームリーダー：鎌谷 直之）では研究員を下記の要領で募集いたします。

1. 研究センターの概要

遺伝子多型研究センターでは生活習慣病等に対するオーダーメイド医療の確立に資するため、疾患関連遺伝子の一塩基多型（SNP）を体系的に解析し、疾患関連遺伝子を探索するとともに、SNPが該当遺伝子の機能に与える影響、SNPと疾患及び薬剤感受性との関連を明らかにするプロジェクト研究を行っている。

2. 募集研究チーム

統計解析研究チーム

3. 募集研究チームの研究概要

大規模な遺伝子多型データ、臨床データを統合したデータベースを構築し、それを用いてオーダーメイド医療を行うために必要な統計的解析を行う。洗練された統計的解析を行うため、新しいアルゴリズムの構築も行う。それらの解析結果に基づき、遺伝子多型をもとに、薬物の効果、あるいは副作用を個人ごとに行うことができるか

り正確に予測するアルゴリズムとプログラムを作成する。オーダーメイド医療を実践するために必要な患者/医師インターフェイスのプロトタイプを作成する。

4. 募集職種、募集人数及び職務内容

募集職種：研究員

募集人数：若干名

職務内容：以下の研究についてチームリーダーの下、自立・自発的に行う。

- (1) 多型を用い、薬剤の効果、副作用などを予測するためのアルゴリズムとコンピュータプログラムの開発・作成
- (2) PCクラスタなどの並列化アルゴリズム・プログラムの作成
- (3) オーダーメイド医療実現のための患者/医師インターフェイスの開発

5. 応募資格

- ・博士号取得者もしくは同等の能力を有する者、数理解析の能力を有する者
- ・C言語による科学計算プログラムの豊富な作成経験および独自での開発能力があること。
- ・UNIXまたはLinuxに習熟していること。
- ・自発的に研究を進める能力を有する者
- ・遺伝統計学を基にした疾患研究に熱意・理解があり、社会人としての常識を備え協調性があること

6. 勤務地

事業所名及び住所：

東京都港区白金台4-6-1

東京大学医科学研究所内 独立行政法人理化学研究所 遺伝子多型研究センター

7. 契約期間

契約期間終了後は、評価により、当研究所が必要と認め、双方合意に至った場合に雇用契約を締結することがあります。必要性の有無は、能力、契約満了時の業務量等に基づき判断します。

但し、平成22年3月31日までを上限とします。

8. 待遇

給与は、経験、能力、実績に応じた年俸制で、通勤手当、住宅手当支給有り、社会保険の適用有り。

休日は、土日、祝日、年末年始（12月29日～1月3日）、当研究所設立記念日。

その他、当研究所規程による。

＊日本学生支援機構 奨学金免除の対象

9. 応募方法及び締切日

[提出書類]

- (1) 履歴書（写真付）
- (2) 論文リスト及び今回応募の関連論文の別刷り
- (3) 志望動機と今後の抱負（800字程度）
- (4) 推薦書1通（原則、現職所属長または指導教官からの推薦書、ただし現職所属長からもらうのが困難な場合は、第3者のものでも可）
＊推薦書の宛名は「遺伝子多型研究センター長」としてください。

(5) 最終学校卒業（修了）証明書

- ＊後送可（面接までに要送付）
- ＊封筒表書きに朱書きで応募職種を明記のすること（例：SRC研究員 応募）

[締切日] 決定次第締め切り

[個人情報の取扱について]

提出して戴いた書類は、独立行政法人理化学研究所個人情報保護規程に則り厳重に管理し、採用審査の用途に限り使用されます。

これらの個人情報は正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することは一切ありません。

10. 選考方法

書類審査後、書類選考通過者に対し、事前面接。その後、本面接を実施。

11. 着任時期

決定次第後、出来るだけ早い時期

12. 問合せ先・書類送付先

〒230-0045

神奈川県横浜市鶴見区末広町1-7-22

独立行政法人理化学研究所 横浜研究所 研究推進部総務課人事係

福島 美佳

TEL：045-503-9119

FAX：045-503-9112

E-mail：m-fuku@riken.jp

●テクニカルスタッフ募集：独立行政法人理化学研究所 遺伝子多型研究センター 情報解析研究グループ 統計解析研究チーム

独立行政法人理化学研究所 横浜研究所 遺伝子多型研究センター（<http://www.src.riken.jp/>）情報解析研究グループ統計解析研究チーム（チームリーダー：鎌谷 直之）ではテクニカルスタッフを下記の要領で募集いたします。

1. 研究センターの概要
（「研究員募集」と同一）
 2. 募集研究チーム
（「研究員募集」と同一）
 3. 募集研究チームの研究概要
（「研究員募集」と同一）
 4. 募集職種、募集人数及び職務内容
募集職種：テクニカルスタッフ
募集人数：若干名
職務内容：研究員、リサーチアソシエイトの指導の下、下記の研究内容の解析研究補助を行う
- (1) 遺伝統計を基にした統計解析
 - (2) 多型と表現型の関連を示すための新しい検定法の開発
 - (3) 多型を用い、疾患感受性SNPsの探索、薬剤の効果・副作用を予測するためのコンピュータプログラムの作成
 - (4) 多型情報などのデータベースの構築
 - (5) オーダーメイド医療実現のための患者/医師インターフェイスの構築
 - (6) コンピュータ・ネットワークの保守・管理
- ## 5. 応募資格
- ・専門学校卒、短大卒、大学卒、いずれでも可。
 - ・UNIXまたはLinuxでの知識・経験があること。

- ・UNIX/Linux上でC/C++, Fortran, Pascal等の高級言語でプログラム作成経験があること、またはデータベース（Oracle, PostgreSQL, MySQL等）での経験（スクリプト作成、操作等）があること。
- ・ネットワークの知識があること。
- ・遺伝統計学を基にした疾患研究に熱意があり、社会人としての常識を備え協調性があること

以下の能力があるとより望ましい

- ・UNIXまたはLinuxでの業務経験
- ・科学技術計算プログラムの作成経験
- ・統計解析のソフトウェア（SAS, S plus, R, Mathematica等）を使った解析経験
- ・統計解析プログラム作成または、データベース構築（Oracleデータベース, PostgreSQL等）の経験
- ・ネットワーク構築・管理
- ・遺伝統計学, 数理統計学の知識

6. 勤務地

事業所名及び住所：

東京都港区白金台4-6-1

東京大学医科学研究所内 独立行政法人理化学研究所 遺伝子多型研究センター

7. 契約期間

契約期間終了後は、評価により、当研究所が必要と認め、双方合意に至った場合に雇用契約を締結することがあります。必要性の有無は、能力、契約満了時の業務量等に基づき判断します。

但し、平成22年3月31日までを上限とします。

8. 待遇

給与は、経験、能力、実績に応じた年俸制で、通勤手当、住宅手当支給有り、社会保険の適用有り。

休日は、土日、祝日、年末年始（12月29日～1月3日）、当研究所設立記念日。

その他、当研究所規程による。

9. 応募方法及び締切日

[提出書類]

- (1) 履歴書（写真付）
- (2) 経験のある研究手法リスト
- (3) 志望動機と今後の抱負（400字程度）
- (4) 推薦書1通（原則、現職所属長または指導教官からの推薦書、ただし現職所属長からもらうのが困難な場合は、第三者のものでも可）
*推薦書の宛名は「遺伝子多型研究センター長」としてください。

- (5) 最終学校卒業（修了）証明書

*後送可（面接までに要送付）

*封筒表書きに朱書きで応募職種を明記のすること（例：統計解析研究チームテクニカルスタッフ応募）

[締切日] ポストが埋まり次第終了。

[個人情報]

提出して戴いた書類は、独立行政法人理化学研究所個人情報保護規程に則り厳重に管理し、採用審査の用途に限り使用されます。

これらの個人情報は正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することは一切ありません。

10. 選考方法

書類審査後、書類選考通過者に対し、事前面接。その後、本面接を実施。

11. 着任時期

採用決定後、できるだけ早い時期

12. 問合せ先・書類送付先

（「研究員募集」と同一）

●教員公募：独協医科大学 国際教育研究施設 医学基盤教育センター

獨協医科大学では下記要領で数学（主に統計学）担当の教官を公募致します。応募者には数学、統計学の講義を担当していただく他、専門性を生かした少人数でのゼミナール、問題解決型テュートリアル教育、学業から生活面にわたる学生指導、あるいは医学研究における統計学全般の相談業務など、広範囲にわたって活躍されることを期待しております。このような業務に熱意をもって当た

られる適任者の応募を希望致します。

機 関：獨協医科大学国際教育研究施設医学基盤教育センター

職 種：准教授，講師または助教 1 名

専門分野：数学または統計学

担当科目：「統計学入門」（医学部 1 年）および「医学統計学」（医学部 2 年対象の医学に関連した応用統計学）の講義・演習など

採 用 日：平成20年 4 月 1 日（予定）

任 期：任期制はとっておりませんが，医学基盤教育センター教員についてはセンター教員評価基準により定期的に業績評価を行います。また，本学の定年は65歳です。

応募資格：

- (1) 博士の学位を有する方（平成19年度末までに取得見込みの方）が望ましい。
- (2) 「統計学」を専門とされる方が望ましいが，「統計学」に関心を持ち，今後医学部 1，2 年を対象とする「統計学」の教育に熱意をもって取り組んでいただける方。

提出書類：

- (1) 履歴書 1 部（所定様式）
- (2) 教育業績リスト 1 部（所定様式）
- (3) 研究業績リスト 1 部（所定様式）および主要論文 5 編の別刷り（またはコピー）とその内容解説（所定様式）
- (4) これまでの研究の概要と今後の研究活動についての抱負 1 部（所定様式1200字程度）
- (5) これまでの教育についての自己評価と本学における担当科目教育に対する抱負 1 部（所定様式1200字程度）
- (6) 医学部学生教育に対する抱負（本学では 1 年から 6 年の各学年に複数の担任教員を置き，

学業から生活面にわたる指導を行なっております。応募者には医学部 1 年の担任を受け持っていただくこともあります。このようなことも踏まえて，医学部学生教育に対する抱負を述べてください。）

1 部（所定様式2000字程度）

(7) 推薦書 1 通（所定様式），または応募者について問い合わせることのできる方 2 名の氏名と連絡先（電話番号とメールアドレス）。（所定様式）

(8) 連絡先（住所，電話番号，メールアドレス）

[注 1] 所定様式はすべて下記の獨協医科大学ホームページからダウンロードできます。また提出書類の記入に関しては「記入上の注意」，「研究業績リストの記載要領」，「研究業績リスト（記載例）」をダウンロードしてお読み下さい。

<http://www.dokkyomed.ac.jp>

[注 2] 応募者には必要に応じて面接のためご来学いただき，模擬講義を行っていただくことがあります。その場合の旅費等は応募者の負担となります。なお，お送りいただいた応募書類は選考終了後返却致します。

提出期限：平成19年11月20日（火）必着

応募書類提出先：

〒321-0293

栃木県下都賀郡壬生町北小林880番地

獨協医科大学人事部人事課 宛

（郵送に際しては，封筒に「国際教育研究施設数学教員応募書類在中」と朱書し，書留にて送付願います。）

問合せ先：

獨協医科大学国際教育研究施設教育部 部長

瀬尾 芳輝

メールアドレス：yseo@dokkyomed.ac.jp

12. 研究集会案内

●第10回情報論的学習理論ワークショップ (IBIS2007)

開催日時：2007年11月5日(月)，6日(火)，7日
(水)

会場：東京工業大学すずかけ台キャンパス すず
かけホール

URL：http://ibis2007.bayesnet.org/

※ ワークショップの趣旨，参加要領等は上記ウ
ェブページをご覧ください。日本統計学会はこの
ワークショップの協賛団体になっております。参
加者が200名に達したところで申込が締切となる
ため，会報到着時に締切となっている場合もあり
ますのでご了承ください。

●統計改革に関する国際シンポジウム開催のお知らせ

このたび内閣府及び総務省の主催で，下記のと
おり国際シンポジウムを開催します。シンポジウ
ムは一般公開ですが，参加に当たっては事前登録
が必要です。詳しくは，ウェブサイトをご覧ください。

記

目的：本年5月に成立した新統計法に基づき，10
月には統計委員会が設置され基本計画の検討が
開始される予定です。これを機会に，今後の公
的統計のあり方について国際的な視野に基づい
て議論を行い，今後の統計及び統計制度の改善
に資するとともに，広く国民に公的統計の意
義・役割等について理解を得ることを目的とし
て開催します。

日時：平成19年11月27日（火）

午前9時30分～午後5時

場所：国連大学 ウ・タント国際会議場
(東京都渋谷区神宮前5-53-70)

招待講演者：Paul Cheung（国連統計部長），
Katherine Wallman（アメリカ大統領府行政管理
予算局首席統計官），Mike Hughes（イギリス国
家統計局国家統計政策部長），Brian Pink（オース
トラリア統計局長），林 賢郁（中国国家統計
局副局長），韓 聖熙（韓国統計庁統計教育
院教育運営課長），統計委員会委員長〔予定〕
ほか

プログラム概要：

開会挨拶

基調講演（日本の統計制度改革について／
統計整備の国際動向）

セッション1：統計制度におけるガバナンス

セッション2：利用者のニーズに対応した統計
整備

閉会挨拶

ウェブサイト：

<http://www.esri.go.jp/jp/workshop/menu.html>

●人文科学とコンピューターシンポジウム（じん もんこん2007）～デジタルアーカイブと時空間 の接点

開催日時：2007年12月13日（木），14日（金）

会場：京都大学 京大会館

URL：http://jinmon2007.oiu.ac.jp/

※ シンポジウムの概要等詳細は上記ウェブペ
ージをご覧ください。日本統計学会は後援団体にな
っております。後援団体の会員は情報処理学会会
員と同じ料金で参加できることになっており，一
般参加よりお得です。詳しくは上記ウェブペー
ジから，シンポジウム実行委員会までお問い合わせく
ださい。

13. 新刊紹介

本会への寄贈ならびに会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を、原稿の到着順に掲載します。

●文部科学省科学技術政策研究所 編著『数学イノベーション』工業調査会（税込2,415円）2007年8月

●菅 民郎 著『らくらく図解 アンケート分析教室』オーム社（税込2,730円）2007年9月

アンケートデータの調査票のつくり方から基本的な集計方法、さらには多変量解析などの解析手法まで、アンケートデータの集計・分析に関する

全てについて紹介している入門書です。

●丸山久美子 著『心理統計学—トポロジーの世界を科学する—』アートアンドブレン（税込3,000円）2007年3月

本書は当初「心理統計学特殊講義」というタイトルで出版される予定であったが、上記のような題名で出版された。第1部は一般的な統計学の歴史から始まり、統計の基礎知識が記述され、大学生の基礎統計学の教材に用いることが出来る。第2部は心理学的誤差や非線形性の問題など極めてまれな主題を論じている。又、本書は日本統計学会75周年記念図書として推薦されている。

14. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2007年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062

東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F

財団法人 統計情報研究開発センター内

日本統計学会係

Tel & Fax : 03-5467-0483

E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

青盛 和雄 名誉会員 加納 悟 会員

長期間連絡不能により、退会したと見なされた者
安達勝彦、安部友紀、井戸川郷子、井上隆、梅林芳弘、大木聡、小野敦、楠義淳、小宮山竜治、坂井まりえ、佐々木文之、佐藤秀、佐藤昇、式地雅人、下山泰治、須永義則、田中俊恵、千葉健史、西山忍、野町幸男、ハクシェダシャハナラ、橋本明浩、長谷川環、畑中雄介、林剛正、藤岡由美、藤縄大介、程野文夫、松尾賢一、黛邦行、三浦徳仁、三代真之、三谷玄悟、森原斗志夫、柳川雄、吉井めぐみ、吉田研一、ラーマンモハメッドモシユール、李綺、林圭完、森本真由美、RISSA OTA
(敬称略)

現在の会員数（2007年10月15日）

名誉会員	23名
正会員	1,427名
学生会員	60名
総計	1,510名
賛助会員	17法人
団体会員	4団体

15. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- ・来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

- ・求人案内（教員公募など）

- ・研究集会案内

- ・新刊紹介

著者名、書名、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

- ・統計学会ホームページURL：

<http://www.jss.gr.jp/>

- ・統計関連学会ホームページURL：

<http://www.jfssa.jp/>

- ・75周年記念事業ホームページURL：

<http://www.math.chuo-u.ac.jp/~sugiyama/jss75>

- ・住所変更連絡用e-mailアドレス：

meibo@jss.gr.jp

- ・広報連絡用e-mailアドレス：

koho@jss.gr.jp

- ・その他連絡用e-mailアドレス：

shom@jss.gr.jp

原稿送付先：

〒560-8531 大阪府豊中市待兼山町1-3

大阪大学大学院基礎工学研究科 数理科学領域

坂本 亘 宛

Tel & Fax: 06-6850-6481

E-mail: koho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用e-mailアドレス）

会 告

2007年10月25日

日本統計学会

会長 北川 源四郎

学会誌の著作権委譲について

日本統計学会は、現在定期的な欧文刊行誌として「Journal of the Japan Statistical Society」を、和文刊行誌として「日本統計学会誌（シリーズJ）」を発行しています。「日本統計学会誌」第1巻は1970年に刊行され、その後、第25巻から第33巻までは各巻の第1号、第2号は英文誌「Journal of the Japan Statistical Society」として、第3号は和文誌「日本統計学会誌」として刊行され、第34巻以降、現在の形態で刊行されてきました。

現在、本会では、過去の刊行誌の電子化及び電子ジャーナル化計画を推進しております。本会では学術の振興・研究成果の共有等の目的のため、なるべく多くの掲載論文を公開したいと考えております。一方、その計画を具体化する過程で、著者より複製権及び公衆送信権の委譲を受けていることを明確にする必要が生じました。近年の刊行誌に関しましては著作権の委譲手続きは完了しており、過去の刊行誌に関しましても著者の方々にご連絡を差し上げて書面による著作権の委譲をすすめてまいりました。しかしながら、連絡先不明などにより著者の方と連絡が取れない場合も多く、現在、著作権委譲の手続きが滞っております。そこで、本会では過去の刊行物に掲載されました論文の著者の方々に、著作権（複製権及び公衆送信権）を委譲していただきたくお願い申し上げます。より具体的には、次の3項目に、著作権者のご了承を得たいと考えております。

1. 日本統計学会は、学術の振興・研究成果の共有等の目的のため、該当する記事の全部または一部を複製する権利、および公衆送信する権利を有する、
2. 日本統計学会は、学術の振興・研究成果の共有等の目的のため、第三者に上記1と同様の権利を行使させる権利を有する、
3. 上記1, 2の行為により収入がある場合は、この収入を本会の運営費用に当てる。

本会では、1970年第1巻第1号以降に出版された著作物について、本会告およびホームページ掲載による告知をもって著作権委譲依頼に代えさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

上記3項目をご了承いただきたい場合、あるいはご不審の点がある場合は、2008年4月末までに本会事務局、または shom@jss.gr.jp までお申し出ください。お考えに沿えるように最善の努力をいたします。また、本会はこの会告が全ての該当する方々の目に触れることを願っておりますが、何らかの事情でこの会告を知る機会がなかったという理由で該当者からのお申し出があれば、期限後においてもあらためて個別に詳しくご説明・ご相談いたす所存です。

なお、甚だ勝手ではありますが、お申し出のない場合は、とりあえずご了承いただけたものとし、電子ジャーナルとして公開する時期が来ました段階で、著作物を（暫定的に）掲載させていただきたく、重ねてお願い申し上げます。